

立命館大学図書館蔵『後水尾院御集』の翻刻と解題

川崎 佐知子

立命館大学図書館に蔵される『後水尾院御集』一冊（請求記号〈911.158 G62〉、資料番号〈11003226401〉）を紹介する。

〔解題〕

立命館大学図書館蔵本『後水尾院御集』は、朝鮮綴冊子本一冊。無地青色草文様刷紙表紙。寸法、竪二八・二糎、横二一・〇糎。表紙の左肩に、打付外題「後水尾院御集 全」を墨書。見返しは本文共紙。本文料紙楮紙。内題として以下の部立を書く。「春」（一丁表）、「夏」（一四丁裏）、「秋」（二〇丁表）、「冬」（四一丁裏）、「恋」（四七丁裏）、「雑」（五七丁表）。本文は每半葉一二行書。墨付七七丁。遊紙は巻頭一丁、巻末一丁。江戸中期写。

巻末の七六丁裏に、①のようにある。

①此一帖者、

後水尾院御集也、依小田原侍従正通朝臣

所望、而不顧秃筆、令書写之、并加奥

書、秘不可被幽函底者也、

天和三稔初夏上旬候

黄門侍郎藤原宗量

※読点は稿者による。以下同。

続く七七丁表に、②のようにある。

② 御歌数

春 百九拾六

夏 七十貳

秋 三百三十貳

冬 八十三

恋 百四十五

雑 百四十八

积教 貳十

賀 貳十四

詞書添 四十貳

都而、千六拾二

外二、八重襷と候はん一首

さらに、七七丁裏に、朱墨で、③のように書かれている。

③此一冊、岡定右衛門所持之也、令懇望写之者也、

享保十二丁末初秋 福富忠章六拾六歳

③により、同本は、享保十二年（一七二七）七月に、岡定右衛門所持の一冊を、福富忠章が写した本であるとわかる。岡定右衛門と福富忠章とは不詳である。岡定右衛門所持本には、①にあったとおり、小田原侍従

正通朝臣の望みで、黄門侍郎藤原宗量が、天和三年（二六八三）四月上旬に書写した旨が記されていた。小田原侍従正通朝臣とは、稲葉正通（のち正往、一六四〇—一七一六）である。『新訂寛政重修諸家譜』（続群書類従完成会）によると、天和元年十二月一日従四位下侍従。天和三年閏五月二十七日に襲封し、相模小田原藩主となる。天和元年十一月十五日より貞享二年九月二十四日まで京都所司代を務めている。黄門侍郎藤原宗量とは、難波宗量（二六四二—一七〇四）である。橋本政宣氏編『公家事典』（吉川弘文館 二〇一〇年）によると、天和三年当時は従二位権中納言。後水尾院歌壇で活躍した従一位権大納言飛鳥井雅章を実父とする。

①の記述を信用すれば、立命館大学図書館蔵本は、天和三年、当時の京都所司代稲葉正通に望まれ、難波宗量が写した本の系統である。天理大学附属天理図書館蔵『後水尾院御集』一冊（請求記号〈911.261.3〉）は、巻末に、①とほぼ同文の記述を有する。同本と立命館大学図書館蔵本との関係は、川崎佐知子「立命館大学図書館蔵『後水尾院御集』について」（『朱』第六十二号 二〇一九年三月）に論述する。

②に、部立（こ）との歌数を示したうえで、総歌数を一〇六二首、および八重襷（蜘蛛手の御製）一首とする。実際の収載歌は、一〇六〇首、および蜘蛛手の御製（歌番号105²）である。一〇六〇首の内訳は、春部一九六首（歌番号1—196）、夏部七二首（歌番号197—268）、秋部三三二首（歌番号269—600）、ただし天理大学附属天理図書館蔵本による増補歌584番を除く）、冬部八三首（歌番号601—684、ただし天理大学附属天理図書館蔵本による増補歌663番を除く）、恋部一四四首（歌番号685—829、ただし天理大学附属天理図書館蔵本による増補歌797番を除く）、雑部一四八首（歌番号830—977）、釈教部一九首（978—997、ただし天理大学附属天理図書館蔵本による増補歌984番を除く）、賀部二四首（歌番号998—1021）、詞書添四三首（歌番号1022—1051、1053—1065）である。秋部・冬部・恋部・釈教・詞書添の歌数が、②の記述に若干異なる。

後水尾院（二五九六—一六八〇）は、第百八代天皇。慶長十六年（一六一二）より寛永六年（一六二九）まで在位したのち、明正・後光明・後西・靈元各天皇の代にわたり、およそ五十年間、院として宮廷の文運隆盛に努めた。立命館図書館蔵本には、その肩付の年次でみる限り、慶長十九年（672番歌肩付「慶長十九御当座」）から、承応三年（174番歌肩付「承応三正三御会始」）までが収載されている。後者は、『続史愚抄』承応三年正月二十三日条に、つぎのようにあり、収載歌の題と一致する。

法皇和哥御会始。題。春風不分処。読師権中納言。共（共）講師藏人頭右中弁熙房朝臣。講頌飛鳥井大納言。（雅聲）奉行右中将実照朝臣。

ただし、天理大学附属天理図書館蔵本によると、29番歌の肩付は「承応三八大神宮御法楽」である。肩付による年次の下限以降の和歌も含まれている可能性がある。

成稿にあたり、貴重な資料の閲覧調査をお許し下さった関係諸機関に深謝する。資料の翻刻の公表については、立命館大学図書館より格別の配慮を蒙った。本研究は、JSPS科研費〈17K02435〉の助成を受けたものである。

〔凡例〕

立命館大学図書館蔵『後水尾院御集』一冊（請求記号〈911.158/G62〉、資料番号〈1100326401〉）を翻刻する。翻刻に際しては、原文に忠実であるよう努めたが、つぎの方針のもと、手を加えた箇所がある。

- 一、漢字は、原則として通行字体を用いた。
- 二、仮名遣いは、原文のとおりとした。
- 三、改行は、原文のとおりとした。丁うつりを、「」（「丁表」）のように示した。

四、朱墨で書かれている部分は、該当箇所の末尾に「(朱)」を付した。
 五、原文にある見消や抹消線は、取消線「—」で示した。朱墨の場合は、「(朱)」と注記した。

六、和歌に、算用数字で通し番号を付した。ただし、一首全体が抹消された和歌にも、便宜上番号を付した。873・874・875・876番歌は、同系統の天理大学附属天理図書館蔵本の配列をもとにした番号を付した。また、原文にない584番歌、663番歌とそれに続く題、797番歌、984番歌は、天理大学附属天理図書館蔵本により補い、()内に本文を示した。

七、蜘蛛手の御製(歌番号¹⁰⁵²)は、周囲に二十四字の漢字により「登有勢字能美屋散無志字右佐牟具半以喜越騰部良夫有太(東照の宮三十三回忌を弔ふ歌)」、中に五行の「薬師仏」が読み込まれていることを意識し、十六首に開き、並べた。

八、天理大学附属天理図書館蔵本との異同を、「」内に示した。なお、漢字と仮名の表記の違い、漢字の同音異字、送り仮名の有無、仮名遣いの異同などは、原則として考慮しなかった。

九、以上のほか、とくに説明が必要な事項がある場合は、「」内に注した。

〔翻刻〕

外題「後水院御集 全」

〔外題「後水院御集」〕

春

試筆 古今御伝受翠年

1 時寛永三しありと聞もうれしき百千鳥さへつる春をけふは待えて

元日口号

2 いかて身のさとひらくる花もみまよはぬ年の春は来にけり

立命館大学図書館蔵『後水院御集』の翻刻と解題

立春風

〔四句「まとはぬとしの」〕

3 天津風散くる雪を吹とちて雲の通路春や立らん

立春曉

4 鳥か鳴東の山の関こえてあかつき近くはるや立らん

〔肩付「寛永十四閏三廿四禁中」〕

初春

5 来る春の道ひろからし峰の雪みきはの氷消ものこらて

6 ゆふへとはみしを幾世の光にて霞そめたる春の山本(二丁表)

〔肩付「寛永十五二水無瀬宮御法楽四百年御忌水無瀬中納言所望」〕

7 ひとよまつ千世のはしめの春もけふ北野の神の恵をそ思ふ

初春朝霞

8 待えたるたかうれしきの春の色霞の袖にけさあまるらん

9 いとはやも霞にけりな檜檜原明やらぬ春の色とみしまに

早春

10 来る春の色もそひけり水無瀬川此山本のかすみ光に

11 春かすみ海より出て明そむるをきの外山や春をしるらん

〔初句「雲霞」四句「おきの外山や」〕

12 波かさを鳴のほかまておさめてや世をおもふ道に春もきぬらむ

13 都にもたちまさるらん目にちかく海みやらる、春の霞は

〔結句「はまのかすみは」〕

14 むかしたに昔を忍ふ百敷に代々のはるのみ立かへりつ、

15 外山には雪もけなくにすゑとをき波路やかすみ色をみすらん

16 神垣や春のしるしは杉ならぬ松のあらしもにほふ梅か、(二丁裏)

〔肩付「寛永十五六廿五聖廟御法楽」〕

17 今朝よりそ氷なる、水無瀬川春のしるしの有て行せに

18 朝日影消あへぬ雪も白鳥のとは山まつは春もわかれす
慶安三十九禁中御座
 19 今日といへはつもるも雪のあさ沓の跡あらはる、百敷の春

早春雪

20 かきくらし降もつもらてのとけさの雪の上にもしるき春かな
寛永六四二廿四

山の早春

21 ゆたかなる世の春は来ぬ花ならて大内山に何をまたまし

〔題「山早春」〕

22 朝霞山のはことにたなひきて四方に長閑き春の色かな

早春鶯

23 神垣の春も一夜の松かえに花をそきとくひすの鳴

〔四句「はなやをそきと」〕

24 梅か、のしるへもまたて来る春に先さそはる、宿の鶯
寛永十三廿一

25 咲にほふ花もをそしと鶯の声にや春の色をそふらん(二丁表)
同十六廿四禁中

26 あら玉の春をもこゑのうちにして世の、とけさを鶯そなく
同九年廿八聖廟御法樂御夢想

27 このねぬる一よの松のうくひすや千世のはしめの春を告らん

28 春のくる天の岩戸の明ほのになか鳴かほの鶯のこゑ

29 はるといへは神の御代より呉竹のよ、にも絶す来なく鶯
後 寛永九四廿五聖廟御法樂

〔肩付「承応三八十一大神宮御法樂」〕

東風吹春水

30 ときつかせ春の色香の水上にまつ吹そめて氷とくらし
前 承応三八十一大神宮御法樂

〔肩付「寛永九四廿五聖廟御法樂」〕

霞

31 水無瀬川とをきむかしの面影もたつや霞にくる、山本
同十八廿三三水無瀬宮法樂 四百年御忌 松下勳進

32 こひつ、もなくや四かへり百千鳥霞へたて、とをきむかしを

朝霞

33 朝朗いつくはあれと塩かまの夜はのけふりやまつ霞らん

34 さえかへるかせや霞をまきもくの檜原かすへもけさはくもらす(二丁裏)

嶺霞

35 ことほりの春にはあへす霞けり今朝まで雪にさえし高根も

〔初句「ことほりの」〕

36 春ふかくかすむやさこそとをからぬ花にうれしき四方の山のは
正保四二十五禁御座

37 みねつ、き松のけふりのそれも猶今一しほに霞春かな
承応二十廿四御座

〔題「嶺霞」〕

38 みねつ、き松もひはらも陰ふかく晴やらぬ色や先霞らん

嶺上霞

39 遠近の高ねそしるきうすくこく霞のうちも色はわかれて

霞添山気色

40 たちぬはぬ春の衣の色そえてはこやの山に霞たなひく
寛永十二正御始

〔三句「色そへて」〕

41 老の坂こえてもとをし霞立はこやの山の春の行すゑ

42 今よりのにしきぬもの、山はあれと春の色とは霞をそみむ

橋上霞(三丁表)

43 かさ、きのわたす雲路のすゑかけて霞につ、く天の橋立
同十六廿四禁中

江上霞

44 めもはるに霞む難波のあしてともおもひ入江のかりの一つら

45 住の江や春のしらへは松かせもひとつ緑の色に霞みて
慶安四二九禁中御座

海上霞

46 和田の原春はけふりの色もみすしほやく浦のおなし霞に
寛永十五二廿五聖廟御法樂

松上霞

47 いつをかはかすむ色ともわきてみむ煙になる、松のよそめは

霞春衣

48 花鳥のあやをりはえて朝霞春の立てふころもきにけり
寛永廿五十三

49 白妙の雪にかさねて遠山をすれる衣や霞なるらん
 「二句」「あやをりはへて」

50 うくひすのこゑのほひを梅かゝのいつこにそえてあかすとか鳴
寛永八九廿五聖廟御法楽
 「四句」「いつこにそへて」

51 長閑なる光をさそふしるへにて花より先に鶯のなく
 「結句」「鶯ぞなく」

南枝暖待鶯

52 行かりは跡にみすてん花の香に鶯いそけ春の初かせ
寛永十四廿二御会始

谷鶯

53 谷の戸やさすか春とはうくひすの吹ちらぬこゑのほひにもしる

梅近聞鶯

54 こゑなからうつすはかりに植しより鶯ならず宿の梅かえ
元和八三三

「肩付」「元和八二二」

鶯声和琴

55 しらふるもなにあふ春の鶯のさえつることのねにかよひつ、
寛永十五廿四御法楽

「二句」「なにおふ春の」四句「さへつることの」

56 千世こもることの下ひにかよふらしも、よろこひの鳥の初音は

「二句」「ことの下ひも」

57 あら玉の春のしらへも鶯のこゑそえてこそことにきこゆれ」(四丁表)

「四句」「声そへてこそ」

名所鶯

58 うくひすのとふこゑのみや古郷のみかきか原の春もへたてぬ

59 芳野川うくひすきなく山吹の散なむ波のうたかたもをし

「肩付」「正保四三廿三禁中御当座」四句「ちゆなん波の」結句「うたかたもおし」

60 さくらちるみかきか原は行春のふる里さへや鶯のなく

鶯入新年語

61 いにしへのことかたらなんいくよろつ代々のはるしる宮の鶯

若菜処々

62 雪消る野原のわかなたつねみむ沢のねせりはつむもすくなし
詩寄御会

寄若菜祝言

63 わかなつむ袖の余所めも白妙の鶴の毛衣千世はみえけり
寛永十七御会始

「肩付」「寛永十正十二御会始」

春雪

64 かきくらしふるもたまらて庭の面はしめるはかりの春のあは雪」(四丁裏)
寛永三四廿四

雪消山色静

65 雪とくる春にしつけし年の緒のなきはこやの山のみとりは
同十五正十一御会始

雪消春水来

66 絶たるをつくや雪けの山水のすゑたのもしき春をみすらん
承応二正廿三御会始

67 峰の雪とけ行春に谷水の末までおよふ恵をそ思ふ

「四句」「すゑまでをよふ」

残雪半蔵梅

68 梅やしる消あへぬ雪の埋木もかた枝花咲春の恵を
正保五正十一御会始

「結句」「春のめくみは」

69 日陰さす梢はみえて雪残るかきねの梅もまつにほふらん

70 にしこそと秋みしむめのおなし枝もわきて残れる雪に咲らん

余寒氷

71 春の日にとけ行すゑも木かくれの山下水やまたこほるらん
元和元

二月余寒」(五丁表)

72 むめの花折へき袖も春さえて猶きさらきの雪そか、れる

梅

73 大空をおほはむ袖につ、むともあまるはかりの風の梅か、
寛永十四廿四禁中

74 咲花のいつこにそめて白妙のひとへなるしもふかき梅か、
同十五廿四禁中

梅花告春

75 世をめぐむ道にもうつせ天か下みな春にあふむめの匂ひを
同廿廿三御会始

若木梅

76 いかにも又色香そはまし宿の梅生ゆくすゑもななき立枝に
同十九廿二聖朝御法業

初梅

77 吹もまたあたゝかならぬ春かせに露待あへすにほふ梅か、
同十五廿七殿上梅見御会梅廿百御当座

毎年愛梅

78 古年よりも今年はまさる色香そと幾春かみる庭の梅かえ」(五丁裏)
同三十九御会始

多年翫梅

79 いく春か言葉の花も咲匂ふこの百敷の宿の梅かえ
寛永六十九

梅風

80 春風はふくともなしに青柳の梢にみえてなひく梅か、
同十五廿百御当座

梅薫風

81 よろつ木にやとしてふくももつかの猶あまりある梅の下かせ

雨中梅

82 心あれや雨も降いて、紅の色そふ今日の庭の梅かえ
同十五廿七殿上梅見御会梅廿百御当座

雪中梅

83 春かせのさえかへる空にさそひ来る雪にまきれぬ梅か香そする
同十四廿四禁中

梅香何方

84 玉すたれひま求入はる風はいつくなりけんあやし梅か、」(六丁表)
寛永八正晦

85 朝霞立枝もみえぬ垣ねよりおもひの外に匂ふ梅か、

梅薫袖

86 袖ごとに匂ひそうつるいやしきもよきもさかりの梅の下かせ
同廿廿五聖朝御法業

落梅浮水

87 駒つなく誰ためかほにむめの花またきちり行春の山水
同十六六五

梅交松芳

88 たちならふ枝にもうつる花の香に松より吹もむめの下かせ
元和朱

梅柳渡江春

89 江の水に舟さす棹のうちならぬ梅も柳も影うつすはる
慶安五廿二御会始

「三句「うちならぬ」

90 江の南梅咲初てをそくとく緑につゝく岸の青柳

柳弁春

91 春はなを柳にしるし緑なるひとつ草木のあるか中にも」(六丁裏)
元和朱

柳靡風

92 花ならぬ柳か枝に吹も猶おもひみたるゝ露の朝かせ
元和八十二

柳露

93 青柳はなかゝをもる露もみすなひくをもとののおか姿に
寛永十六廿七四禁中

「四句結句「なひくももとのをのか。すかたに」
もとの(補入記号・傍書本)

行路柳

94 別路の心ほそさを行人にたか折そえし青柳の糸
同八廿五聖朝御法業

「四句「たか折そへし」

垂柳藏水

95 きしかけの柳の梢いとたれてまつならなくにこゆる河波

柳枝臨水

96 氷とく池のかゝみに影みえて柳のまゆも世にたくひなき
寛永八正廿八

柳臨池水

97 青柳のいとたえすして万代をすむへき影や庭の池水」(七丁表)
元和十正十九

98 朝みとりなひく柳の色そへて今一しほのはるの池水

「初句「浅みとり」四句「いま。しほの」

99 くりかえし千とせもあかし春の池の瀧の白玉青柳の糸

「初句「くりかへし」

若草

100 やとりつる小蝶の夢もさめさらんねよけにみゆる野への若草

春草

101 分みれはおのかさまく花そ咲ひとつみとりの野辺の小草も

「二句」をのかさまく」

春月

102 かすむとは誰いつはりそ白妙の花にくもらぬ春の夜の月

103 月影はそことなきまで霞む夜に木の下やみそひとり晴行

104 かすみ行影さへうれし小夜風のさえし戸ほそを月にひらきて

春暁月

105 雲にあふあかつき方の影もうし霞むかうへの春の夜の月（七丁裏）

106 なこりあれや待出し方に影うつる花の梢の月の明ほの

深夜月

107 かたふけはこすのまちかく入月のおほるけならぬ哀をそしる

浦春月

108 浦舟の苦かゝけてや難波江の梅かゝならぬ月もみるらし

109 かすむともわかすやいかに春の月けふりになる、浦のみるめは

110 月影の霞めるほとも浦なみにみえてさやけき海士の漁火

旅宿春月

111 旅まくら都おもへは都にてみしにもあらず霞む月かな

「肩付」寛永十六二廿四禁中」

春曙

112 詠てそ身にしみかへるかりかねのなこりもつきぬ春の曙

春雨（八丁表）

113 立鳥のあらぬ羽音をともなく霞む軒端の雨を聞かな

114 雪消てうすみとり成野辺の色も一しほの春雨そふる

115 道とをくきてやおほゆる行人のぬる、はかりの衣春雨

閑居春雨

116 春の雨もさたかにそ聞をとつれの人にまれなる宿の軒は、

帰雁

117 春霞かくすみやこの山の端をかえりみかちに雁も行らし

「肩付」寛永十六正廿四禁中」二句「かくすやこの」四句「かへりみかちに」

暁帰雁

118 あかつきの別といへは春のかり帰る雲路もしたひやはせぬ

「肩付」寛永十六六五」

深夜帰雁

119 あかつきの鳥より先に鳴初てなれも別やをしむかりかね

「結句」おしむ雁かね」

雉（八丁裏）

120 子をおもふ心やはす夕ひはり床をならへてき、すなくなり

「肩付」同四三廿四」

雲雀

121 夕ひはり我ある山の風はやみふかれてこゑの空にのみする

桜

122 しほみては磯山さくら吹かせにこれもみらくの盛すくなき

柳桜交枝

123 花の時にははすは何を玉の緒の柳さくらにあかぬ春かな

「肩付」寛永二廿二水無瀬宮御法楽」

待花

124 いさごゝに千世も待みむ花のともあかぬ心に春をまかせて

125 常盤なる種もあらなん住の江の松は久しき花ならぬかは

「肩付」同十六二廿四禁中」

初花

126 尋常の色香ともみすまたれこし初花染の深き思ひに（九丁表）

〔結句「ふかき思ひは」

花初開

127 いさぎよき朝露ながら咲そむる花に盛の色はあれとも（同十五九廿四禁中）

〔四句「はなよにさかりの」

澗花然暮雨

128 長閑成ゆふへの雨を光にて谷にも春の花は咲けり（同十七廿一五御当座）

129 夕ぐれの雨にさきてや澗の戸の花もあしたの雲となりなん

見花

130 あかなく（同十四十一廿四禁中）に心の色やみるたひにまたみぬはかり花にそふらん

〔肩付「寛永十四十一廿四禁中」初句「あかなくの」

見花恋友

131 友こそは色香の外の色かなれとへかし花の盛すくさて（同三廿四）

〔肩付「寛永三三廿四」

翫花

132 まとひしてみる人からや花にあかぬ色香もけふに似る時はなし（同十六三十四）

〔初句「まどゐして」

折花（九丁裏）

133 折のこす明日みむ人にみぬ人の今日のためなる山の桜も（同十六六五）

〔肩付「寛永十六六五」

寄雪花

134 はななれや春日うつろふ山の端にあた、かけなる雪の一むら

〔四句「あた、かけなる」

寄風花

135 さそへともちるへくもあらず盛なる花には風のとかもかくれて

花隨風

136 花よいかに身をまかすらんあひ思ふ中ともみえぬ風の心に

花雲

137 天津風しはしと、めんちる花の雲のかよひ路心してふけ（寛永十六廿七）

138 花なれや遠山かつら白妙に麓をかけてあくる光は

雨後花

139 雨の、ちはなそまれなる花にこそまるとみえし青葉かくれに（同十五十一廿四禁中）

〔肩付「寛永十五十一廿四禁中」

曙花

140 かすみ行松はよふかき山の端に明ほのいそく花の色かな（同十六五廿四禁中）

花下忘帰

141 みる人ももしあひおもふ心あらは花もねにかえる道をわすれな

〔初句「みる人を」結句「わすれね」

暮山花

142 ことさらにたひねしぬへく暮にけりこえ行山の花の下かせ

杜花

143 しめのうちの花をよきてや神垣の森の春かせ吹ものときき（寛永十二三廿五聖御法衆）

144 月影のもりのしめ縄くる、よに光そひたる木々の花かな

145 ぬれそは、移りや行とみるからに杜の雫も花にむつまし

河上花

146 花盛過行ものは川波のよるひるわかぬならひかなしき（寛永十三廿十）

禁庭待花

147 鶯のこゑのつ、みも百敷や軒はの花にかけていそかん

山家花

148 春をへてちらすもあらなん柴の戸に花もうき世の外ならぬかは

〔三句「柴の戸は」

149 花留人
寛永十三十一十六二百御当座
みるかうちにかたらふ人のなさけまて花にそへてもえこそみすてね

150 花漸散
寛永十四晦
日数こそつるにつられ山かせのさそはぬ花も青葉そひ行
〔肩付「同十四二晦」〕

151 落花
同十六正廿四禁中
山になく鳥の音にさへちる花のむなしき色はみえてさひしき
〔肩付「寛永十六正廿四禁中」〕

152 旅宿花
花の比は野山を宿のならはしに又今さらに旅ねともなき
〔二丁表〕

153 逐年花珍
寛永十二三
春を経てなるゝにいと、染まさる心や花の色にいつらん

154 みるたひにみし色かともおもほえず年ふる春の花そふりせぬ
155 春ことの花やいかなる 猶みぬ色もかもそふ地して
〔三句「こそは猶」〕

156 梨花
同十四二晦
ふる雨にましらぬ雪の枝たはにつもる色そふ山なしの花

157 梨
同四三廿四
雪なからうつろふ月はさむからてたくひもなしの花の色かな

158 苗代
同十三十一十六二百御当座
あらそはぬ民の心もせきいる、苗代水のすゑにみえつ、
〔肩付「寛永十三十一十六二百御当座」〕

159 河款冬
よし野川さくらは波に行春もしはしせくかとにほふ山吹
〔二丁裏〕
160 やまふきのうつろふかけや五百年にすむ名も色に井手の玉川
〔肩付「承応二正晦御当座禁中」〕

161 山ふきやいはてもおもふ芳野川はやくも春のをしきなこりを
〔四句「はやくの春の」結句「おしき余波を」〕

162 里款冬
寛永八十二正晦禁中御当座
里の名のいはても物をとばかりに何か露けき山吹の花
〔肩付「寛永八十二廿五聖廟御法楽」〕

163 藤
同八廿五聖廟御法楽
はひかゝる草木もわかす紫の色こきふしのあかぬ心を
〔結句「あかぬ心は」〕

164 藤花久盛
正保三十六御会始
いはひつる松に契りて君と臣あひにあひをひの春の藤なみ

165 松上藤
寛永十六正廿四禁中
玉かつらみねまてかけて咲藤に木高き松も谷の埋木

166 池藤
同十六七廿四禁中
池水そむらさきふかき咲藤はをしの翅の色もうかひて
〔二丁表〕

167 さく藤もうら紫の色にいてぬとはれぬ宿の池のこゝろに
168 咲ふしのかけをまして池にすむ鴛もありしにまさる毛衣
〔二句「かけをましへて」〕

169 百敷やありしにまさる影みえて池水ひろき春の藤浪
於新造内 御当座(朱)
〔肩付「於新造内裏御当座(朱)」〕

170 山ふきをうふる汀は咲ふしのかけもありしにまさる藤なみ
〔結句「まさる池水」〕

171 暮春雨
正保二十二六禁中御当座
ひちかさの雨にかくれん宿りたにしはしもとらて行春はうし
〔初句「ひちかまの」〕

172 此夕はなものこらすあま風にきほひてかへる春のさひしき
山残春

173 かきりある春はかひなし外のちる後しも花はにほふ山にも

春風不分処

174 風も今おさまる春に遠近のわすれすなれぬ心をやふく

175 世は春にもれぬ恵の風にこそ所もわかす雪はけぬらめ(二二丁裏)

春朝

176 春にみむかすむあさけそ色もかもそなはるの四の時はありとも

春木

177 神垣や昨日にも似すくる春の一夜の松は霞わたたりて

松色春久

178 八千年をはるの色なるかけもあれと猶かきりなき庭の松かえ

〔肩付「寛永元三廿五行幸女院御所」〕

松契春

179 これやこの千年のはしめあたらしき春しる宿の庭の松風

180 今よりの春をかさねて風の音もすむへき宿の松の行末

181 松か枝も千年の外の色そはむ此宿からの春のひなかき

〔結句「春のひなかき」〕

緑竹弁春

182 めつらしきこゑの色そへくれ竹の千世のみとりを鶯のなく(二三丁表)

183 深みとり雪けにぬる、竹の葉や松よりさきの春の一しほ

春到管絃中

184 たにかけもあはまきはかりふく笛のこゑの中なる春の長閑けさ

陽春布徳

185 宿ごとに咲梅か、やとなりあるはるの心を先しらすらん

〔肩付「寛永十二正十九御会始」〕

186 世をはなにもよほし立る風雨もさらに時ある春の長閑さ

187 くまもなき人の恵を鳥すらも百悦ひの春や告らん

188 世はさらにおさまる春そ下にある司はなる、き、すをもみよ

189 世は春の雨にまさりて草も木もうるふ恵の露やあまねき

風光日々新

190 昨日よりけふはめつらし花鳥も千世をならさん宿の初春

191 民を思ふ道にもしるや白雪のふかきにそめぬ春の心を(二三丁裏)

毎家有春

192 今すめる霞のほらの宿もあれと猶九重の春そのとけき

193 世はなへて梅や柳の時つかせたかかきねかは春をへたつる

春風春水一時来

194 うき草のすゑより水の春風や世に吹そめて長閑かるらむ

〔肩付「寛永十六正十九御会始」〕

江山春興多

195 氷とけし江の水とをく山かすむ春や言葉の世々の種成

196 ひきうえし松も高砂住の江の春に相生の緑をやみむ(二四丁表)

〔初句「ひきうへし」〕

夏

首夏

197 夏きてのひとつみとりもうすくこき梢におのか色はわすれて

〔四句「梢にをのか」結句「色はわかれて」〕

198 けふといへは心を分て時鳥はなをおもふかうちもまたる、

199 東きては衣はすてふ由雲のかきなるみねの陰ぞ涼しき

〔底本・天理大学附属天理図書館蔵本とも抹消線は朱墨〕

林首夏

200 すむ鳥も春より後ばうしとなく散し昨日の花の林に

〔二句「春より後や」〕

更衣

201 ひきかえてみえむもかなし夏衣うらなく花に染し心を
正保四六三禁中御当座

〔初句「ひきかへて」

貴賤更衣

202 これや此もとつ色なるしらかさねけふの袂は品もわかれて
寛永十六廿六聖廟御法衆

〔結句「品もわかれす」

残花（二四丁裏）

203 咲ぞめし面影なから日にそへてまれなるなつの山さくらかな
寛永元四六

新樹

204 常盤木に色を若葉のうすもえきおなし緑の中に涼しき
寛永十三廿二首御当座

〔肩付「同三十一十六二百首御当座」

庭樹結葉

205 さつきまつはな立花に色そえてさくらしける夏の庭かな

〔三句「色そへて」

卯花似月

206 里まてはさしもをくらぬ影なれやうの花山のかへるさの月
同十六廿四禁中

〔肩付「寛永十六十一廿四禁中」

溪卯花

207 おひて又帰るふるすに卯の花の雪をやわくる谷の鶯

社卯花

208 白妙の衣ほすかと川やしろしのにみたれて咲る卯の花
同十四廿四禁中

〔肩付「寛永十四廿四禁中」

卯花繞家（一五丁表）

209 月影はめくらぬ方のかきねにも咲卯の花そ光さやけき
同十六五八

待郭公

210 時鳥まつこそしるしさく藤の花のたよりをやとにすくすな
寛永十四四廿四禁中

五月時鳥

211 ほと、きすおのかさ月はをりはえてひくやあやめのねををしまぬ
〔二句「をのかさ月は」三句「をりはへて」結句「ねををしまぬ」

夕時鳥

212 ほと、きす夕と、ろきのまきれにも待一こゑは猶さたかにて
同廿八廿七

〔題「夕郭公」肩付「寛永廿八廿七」

213 神祭る卯月のかけも白妙のゆふかけて鳴時鳥かな

郭公幽

214 一こゑの空そ明行時鳥鳴つるかたの月もほのかに
同十五廿七

〔肩付「寛永十五廿七」

215 跡したふた、一こゑの時鳥とをき入さの山の端の月
くが

〔四句「とをき入さの」

岡時鳥（二五丁裏）

216 ほと、きす鳴て今きの岡の松まつにかいあるこゑの色哉
同八四廿五聖廟御法衆

〔題「岡郭公」四句「まつにかひある」

217 古郷とならしの岡のほと、きすよにしのひねや爰に鳴らん

〔四句「またしのひねや」
よに

218 一こゑもゆき、の岡のほと、きす里をあまたに聞やつたへん

島時鳥

219 ほと、きす嶋かくれ行一声をあかしの浦のあかすしそおもふ
寛永十六四十一廿七禁中

〔題「嶋時鳥」

早苗

220 山水の瀧つなかれをせき入て雨まちあへすとる早苗哉

牡丹

221 おもへとも猶あかさりし花をさへ忘るはかりのふかみ草哉
寛永十六三廿七禁中

〔肩付「寛永十六三廿七牡丹見」〕

222 ひとときはのかささへそひて紅の色もことしはふかみ草哉

223 日陰さす露のひるまを盛にて色もにほひもふかみ草哉

沼菖蒲（二六丁表）

224 しけりあふ草の緑にかくれぬのあやめもけふやわきて引らむ

〔肩付「寛永十四十五」〕

夜廬橋

225 なこりなをむかしおほえてみし夢の後もまくらにかほる立花

古郷橋

226 古郷の軒端にほふ橋やむかししのふの露をそふらん

〔題「故郷橋」、天理大学附属天理図書館蔵本は一首を朱墨で抹消〕

杣五月雨

227 杣人は宮木もひかぬ五月雨に山とよむこゑや瀬々の川浪

228 真木なかつ河浪たかき五月雨に力をもいれぬにふの杣人

岡五月雨

229 岡にもやつみにのほらん麓川行水たかき五月のころ

〔結句「五月雨の比」〕

夏月

230 あつき日のくれかたかりしなこりしも待とる月のあかぬ涼さ（二六丁裏）

231 松風もりちにや通ふ夏しらぬ月そまことの霜の色なる

夏月易明

232 さし入てをくも残らぬ槓の戸のあくるよしな月のみしかさ

〔肩付「寛永十四九卅御当座」二句「おくものこらぬ」四句「あくるよしるき」〕

233 なつの日をなかくめくらしめてみすもあらずすみもせぬ影や短夜の月

瀬夏月

234 夕す、みわたりもはてす此河の浅瀬白なみ月そ明行

浦夏月

235 白妙元箱の色そす、しきなつ衣かとり浦の浪と月とに

瞿麦

236 露けしなたか別をかけたひこしねてのあさけのとなつの花

瞿麦帶露

237 かしこしなわか国民をなてしこの花の上まで露おほきよは（二七丁表）

籬瞿麦

238 朝夕のまかきの露やかそいとおほし立けん花のなてしこ

野夏草

239 たのもしな夏野々草もふむ跡はたえなんとする道を残して

峰照射

240 さをしかのたつたの奥ものこらぬや峰にも尾にもともしする比

〔肩付「寛永九五廿五聖廟御法楽」〕

241 あくるよをのこす影とやこの暮のしけきおのえにともしさすらし

〔四句「しけきおのへに」〕

深夜螢

242 たかおもひあまりていてし玉そともよふかくみえて飛ほたる哉

〔三句「雨そとも」〕

243 あはれ我よはひも今はふくる夜の窓の螢はあつめてもなに

池螢

244 さ、浪のよるさへみえて螢とふ池の玉もの光す、しき（二七丁裏）

〔肩付「慶安四四十四禁中御当座」初句「さ、浪や」〕

沼螢

245 もえわたる思ひはあはれかくれぬのうきをは人に知ぬ螢も

江螢

246 難波江や夕す、しくか、り火にあらぬ螢もうきてもゆらむ

叢螢

247 草の上にはけさそ消行白玉か露かとまかふ夜はの螢は

垣夕顔露

248 賤のおか玉かきかなれや白露もす、しくかゝる花の夕かほ

蚊遣火

249 蚊のこゑをはらひはて、も賤かやにくゆる煙はまたやくるしき

里蚊遣火

250 里人もかやりたくなり難波かたあまの藻しほのけふりくらへに（二八丁表）

夕立

251 音羽山をとほ聞えて夕立のこゝに降来る程をふる哉

252 つねはみぬ山のみとりに瀧落てなこりもす、し夕立の雨

晩立

253 空の日のけしきをかえて降音はあられに似たる夕立の雨

遠夕立

254 むさし野や此野々末も降来るもしはしよそなる夕立の空

野夕立

255 雲とちて野辺はふり来る夕立の跡よりはれてむかふ山のは

杜蟬

256 たき波を梢にかけて山ふかきけしきの森のせみのもろこゑ

樹陰蟬（一八丁裏）

257 秋かせもせみ鳴露の木かくれてしのひくに通ふ涼しさ

258 霜かれの木の葉そまかふ鳴せみのはやまはしけき梢なからも

納涼忘夏

259 涼しさのことはり過てはてはまた秋風ふけぬ森の下陰

〔肩付「寛永三六廿四」〕

松下納涼

260 むかしきくをの、えくたす松かけもこゝにおほえてあかぬ涼しさ

晩夏

261 飛螢つけていぬへく来ぬ秋のはつかせしるき雲の上哉

六月祓

262 飛鳥川なかれてはやく年なみのなかは程なくみそきすらしも

夏河

263 うかひ舟幾瀬のほりてかゝり火の螢よりけにかすか成らむ（二九丁表）

264 かはり行ふちせをみせて飛鳥川昨日の春の花ものこらす

夏関

265 おのか上にき、をひてこそ時鳥まつになこそその関の名もうし

〔初句「をのかうへに」二句「き、おひてこそ」結句「せきの名もうき」

夏木

266 とひみはや難波のことも橘のむかしにかへる道はありやと

夏鳥

267 夢うつ、わかつて過にし時鳥こよひ定めむ一こゑもかな

夏衣

268 夕す、みうすき袂をはては又いとふはかりの杜の涼さ（二九丁裏）

秋

269 すゑ終に身にしむ色の初しほや衣手かろき今朝の秋風

初秋風

270 此ま、にうきことそはぬ秋もかな涼しさのみの今朝の初かせ

初秋露

271 寛永十六年二十五聖廟御法案
いにしへもさこそは露をほさゝらめ心つくしの秋の初かせ

272 むかしより心つくしの秋かせにむすひそめてや露はひかたき

273 今朝はまたおきも音せて露白き小萩か上そ秋をみせける

初秋朝露

274 同十六年廿四禁中
吹こほす秋の朝けの露みえて初かせしろきあさちふの庭

〔肩付「寛永十六年廿四禁中」〕

杜初秋

275 は、そ原露より先の秋の色に染ぬもしるし森の下かせ」(二〇丁表)

276 とはやおもふやしるへ我心つれて生田の杜の秋かせ

〔初句「とは、やと」〕

関初秋

277 寛永十六年廿四禁中
初かせの関ふきこゆるすまの波に秋なき花もちりやそふらん

都初秋

278 いつしかとけふは紅葉の秋も来ぬみしはきのふの花の都に

279 音羽山音にもしるし都にはまたいたりたゝぬ秋のはつ風

早秋

280 きのはなを吹かへつ秋の風身にしむまでの音はわかねと

281 すゝみこし松の木陰も思ふにはなへての秋に似るへくはなし

早涼

282 問はやなまた世にしらぬ秋かせにさこそ生田の杜のすゝしき

〔三句「秋風も」〕

283 慶安三十七年御当座
色みえはこれやはつしほ紅葉する秋のけしきの杜の涼しき」(二〇丁裏)

〔肩付「慶安三十七年御当座」〕

284 か、やける玉のうてなの露よりもむくらの宿の秋や涼しき

早涼到

285 すゝしさをいつくにこめて吹風の昨日にも似ぬ秋を告らん

286 風のみか木の間もり来る日の色も薄き袂の秋の涼さ

早涼知秋

287 世にしらぬ秋をや告るおのつから清く涼しき庭の朝かせ

〔三句「をのつから」〕

残暑

288 今朝の間は風も秋なる木かくれに暑き日陰そやかでもりくる

289 秋来ても猶たえかたくあつき日のさすかに暮る影の程なさ

〔二句「なをたへかたく」〕

七夕月

290 夕月夜とく入比そ七夕の舟出をいそげ天の川長

七夕風」(二二丁表)

291 此比のせこか衣の初風をうらさひしとや星合の空

292 よを残す霧もこそあれ秋のかせ吹なはらひそ星合の空

七夕霧

293 絶せしの契りも秋の霧立て忘れぬ中やほし合の空

294 霧はれてけふは詠めん織女のおもふか中は立へたつとも

〔初句「霧あれて」〕

七夕雨

295 おほつかな雨降くらす七夕のゆきあひの空は雲もかよはず

296 たか涙雨とふるらん織女のけふしもほさん天の羽ころも

七夕地儀

297 織女のけふのあふせも飛鳥川あすも涙の淵となりなん

七夕河

298 七夕のななき契りやかけ帯となるまでたえぬ天の川浪」(二二丁裏)

名所七夕

299 ほし合の空にかさはや明る夜をくらふの山に宿り求て
300 こよひさへ衣かたしき彦星に恋やまさらん宇治の橋姫

七夕別

301 みなからもいかに恋しき別ては年をへたつる天津星合

七夕即事

302 ほしあひの空にきくらし糸竹のこゑ澄のほる夜半のはつかせ

七夕草

303 わすれ草種とらましをとばかりは恨もはてし星の契りは

304 百敷や言葉の露の手向草いくよかはらぬほし合の空

七夕鳥

305 初秋の夜はなかゝらて長鳴の鳥ねつらき星あひの空(二二丁表)

〔四句「鳥のねつらき」〕

七夕衣

306 かさぬるも夢とやおもふ織女のかへしなれぬる中の衣は

七夕硯

307 かはらしなかはらの硯とりむかひかすかく世々の星合の空寛永三七丁

308 天川浪もかへるな織女に手向る筆の海をふかめて

309 織女にかす物にもかとりむかふ硯と筆のちかき契りを

〔結句「ちかき契りを」〕

310 ほしあひの空に何をか手向まし硯も筆もうとむ浮身は

七夕糸

311 山姫も瀧のしら糸くりためてけふほし合の空にかすらん

〔結句「そらにかすらし」〕

七夕祝

312 すゑ絶ぬ代々の契りはかはらしなみもすそ川も天の河原も

織女期秋(二二丁裏)

313 みな月は時もあつしと秋かけていひし契りや星合の空
314 からにしき立田の山の秋よりも一夜をや待ほし合の空

織女惜別

315 織女の別よいかに今こむといはむ中たにつらきならひを

316 たなはたの中くあかぬ別にやありしにまさる物おもふらん

牛女年々渡

317 七夕の年のわたりの天の川まれのあふせに数やつもらん

憶牛女言志

318 天の川絶ぬ契りをおもふにも入ぬる磯のうらみもやなき寛永十七丁

319 あらためぬ契やつらき織女のたはふれにくき中の月日を

320 天の河絶せぬよ、はになくさめむさしも入ぬるいそのうらみも

〔二句「絶せぬよ、ゆに」〕

321 こよひあふ上の星のやとりとる空にくらふの山をかきなん(二二三丁表)

〔底本・天理大学附属天理図書館蔵本とも抹消線は朱墨〕

代牛女述懐

322 おもふそよ天津日嗣も天の川神代のちきり絶ぬ行糸に

323 世はなにの道もかへらぬむかしにはあふ瀬まれなる末の川なみ

〔底本・天理大学附属天理図書館蔵本とも抹消線は朱墨〕

324 ほし合のそらにもさこそ物ごとにあく時しらぬ人のおもひは

〔底本・天理大学附属天理図書館蔵本とも抹消線は朱墨〕

天河雲為橋

325 わたるてふ紅葉やいつこ詠れは雲のみかゝる天の川橋寛永二七丁

夜萩

326 さひしさはゆふへの空につきにしを又夢さそふをきのうは風

〔結句「おきのうは風」〕

327 草も木もなへてはふかす小夜風のひとりひまなき萩の音哉

328 寛永十四十一廿四禁中
ふかき夜の物にまきれぬしつけさやこゑそえけらし萩の上かせ

〔四句〕「こゑそへけらし」

萩

329 これも又錦なりけりこきませて萩もすゝきもなひく秋風」(二三丁裏)

萩露

330 をりとははいとひやするとをしみてひとりこほるゝ萩の上の露

〔初句〕「おりとはは」三句「おしみて」四句「ほひとりこほるゝ」

331 さやけしなきよく涼しき萩の戸のはなにとられぬ露の光は

332 萩かうへそかせも吹あえぬこゑ立るおきは中く露もこほさて

〔二句〕「かせも吹あへぬ」

333 袖かけてをらは落ぬへく色にしもあたの大野の萩の上の露

〔二句〕「おらはおちぬへく」

野萩露

334 此比の野辺やいかなるはきの戸をみるたにあかぬ露の盛に

〔結句〕「露のさかりは」

女郎花

335 をみなへしなまめく花の朝かほや妻とふ鹿もおもひうつらん

336 露に又心に分て女郎花風のまもなをなひきそふらし

337 たかためにおもひみたれて女郎花いはぬ色しも露けかるらん

338 誰ための露ふかゝらしをみなへし秋の千種におもひみたれて」(二四丁表)

339 秋風のそなたになひく女郎花心をわけてむすふ露かも

野女郎花

340 誰か此野をなつかしみ女郎花なひく一よのまくらかるらん

路薄

341 みたれあふお花かなみにかち人のわたれとぬれぬ道まよふらん

342 まねくともたれかはわけむ古郷の道もなきまでしけき薄を

343 萩か枝はをりやつされて道へのお花にふかき露の色哉

〔二句〕「おりやつされて」

しのすゝき

344 きりにのみむすほふるらししの薄ほにたに出ぬ秋の心は

〔題〕「しのすゝき」二句「むすほゝるらし」

刈萱

345 しきたへのたか枕にかかるかやの末葉みたるゝ野辺の朝露

蘭

346 ふちはかま吹風ふれて秋の野々草のたもとも香こそにほへれ

347 蘭みたるゝ色もむらさきのすそ野々露はふまゝくもをし

草花

348 さまゝに心うつりて咲花は千種なからにあかすしそおもふ

349 あさかほの花より野への夕露も思ひけたるゝ秋の庭哉

草花早

350 みそむるそおもひはふかき咲花の色はいつれとわかぬ千種も

351 虫の音をたつねもやらす咲初る花野々露にうつる心は

352 花の上の露はひとつをいかにしてまたき千種の中に咲らん

〔底本・天理大学附属天理図書館蔵本とも抹消線は朱墨〕

草花露

353 かゝやくは玉か何そと百草の色にとられぬ花の白露

354 朝顔のあたなる色か朝露は消残りても先しほれ行」(二五丁表)

朝見草花

355 朝またき露しらみ行庭の面にはへある秋の花の色く

356 霞にも千重まさりけり霧わたる秋の花野々露の明ほの

357 夜の間にやひもとく露のふかゝらし今朝そ千種の花も数そふ

穂花

358 寛永元七廿御当座 千々に身をわくともあかし秋の花のひとつくとまる心は
 359 はえあれやくろきあかきのませの内に千種の花の色をつくして

〔初句「はへあれや」

槿不待夕

360 元和八六御当座 花よりはしはしをくるゝそれも猶夕影またぬ朝顔の露

枕露

361 同九廿五聖廟御法乘 なへてをく草木か外も露けきや秋をならひの夜半の手枕

虫〔二五丁裏〕

362 寛永十四廿四禁中 色みえはおのかさまくなき出るそれもや千種野への虫の音

〔二句「をのかさまく」

363 秋のこゑの中のほそをやたえかたき涙いさなふ夜半の虫の音

〔三句「たへかたき」

虫怨

364 同十五廿四禁中 うらかるゝ真葛か中の秋風をねにあらはして虫もなくなり

〔肩付「寛永十五十一廿四禁中」

365 我そまつ聞をひかほに歎かるゝ誰ためならぬむしのうらみを

〔二句「聞おひかほに」

夕虫

366 やとりとる誰を松むし草ふかきまかきを山と夕暮のこゑ

夜虫

367 寛永二九御月次 よなくの霜をしのひて松虫の名にあふこゑの色もかはらぬ

〔四句「名におふこゑの」

368 よひの間に聞しにも似す露さむき笹の虫の暁のこゑ

369 月宿る浅茅か露に虫鳴てよるこそ秋はすむ心地すれ

370 寛永十四廿四禁中 折しもあれよさむの衣かりかねにはた織虫もこゑいそくらし〔二六丁表〕

原虫

371 寛永十三廿五御当座 秋風にみたれてしけきむしの音はみやきか原の露にまきれて

〔結句「露にまきれり」

山家虫

372 なくむしもなにかうらむるのかれこし山はうき世の外にやはあらぬ

373 都にて聞しにも似す山ふかみ瀧の音そふ夜半の虫の音

374 松虫のまつやたれなる柴の戸は八重葎してとちはてし身を

松虫

375 あさちふの霜にもかれぬ声の色やひとりなにあふ野への松虫

〔四句「ひとり名におふ」

376 慶安二七廿禁中御当座 露しけき浅茅か宿は月ならて何かまつてふ虫もなくらむ

377 昔みし友やしのふの軒もりてしけき浅茅か松虫の音に

〔三句「軒ふりて」

鈴虫

378 ふるき世のためしはしるや御狩たに今はかた野々鈴虫の声〔二六丁裏〕

379 白妙の霜にまかえてきりくすいたくな侘そすめる月かけ

〔二句「霜にまかへて」

鹿

380 小男鹿のおのかすむ野々花にさへ心をわけぬ妻やとふらむ

〔二句「をのかすむ野々」

381 いねかてにつまやとふらん秋萩の下葉色つく野へのさほ鹿

〔結句「のへのさをしか」

月前鹿

382 寛永十四九十三 一しほの色もこそそへ夜半の月鹿なく山の秋を問はや

383 おのかつま恋しき時や棹鹿の山より月の出て鳴らん

〔初句「をのかつま」

384 月すめる今夜となれはなく鹿の色の色さへ聞しにも似す

〔結句「聞しにも似ぬ」〕

夜鹿

385 さをしかも山とりの尾の長きよをよそにへたて、妻や恋らん

386 あつさ弓いる野々鹿や我方にひけはよるく妻をこふらん〔二七丁表〕

〔結句「妻やこふらん」〕

387 あま小舟よるの袂をぬらすともさしてしらすやさをしかのこゑ

388 秋のかせ夜さむなりとや小男鹿もかれにしおのかつまをとふらん

〔四句「かれにしをのか」〕

聞鹿

389 聞人のかたるをき、ておもふさへ身にしむ物よさをしかのこゑ

390 野辺になく男鹿のこゑを萩の戸の花にならして聞よしも哉

深山鹿

391 秋ふかき太山をろしにさそはれて紅葉にまじる小男鹿のこゑ

〔二句「太山おろしに」〕

392 鹿そなくすむやいかにととふ人に太山の里の秋をこたえて

〔結句「秋をこたへて」〕

393 おのか上に何よを秋の山ふかくおもひ入らんさをしかのこゑ

〔初句「をのかうへに」〕

394 鹿の音に立ならひてもかたはらの太山にならぬ木々の色かな

〔底本・天理大学附属天理図書館蔵本とも抹消線は朱墨 四句「太山木ならぬ」〕

395 なく鹿のこゑにそこもをのかすむ山よりふかき秋のあはれは

〔底本・天理大学附属天理図書館蔵本とも抹消線は朱墨〕

鹿驚夢〔二七丁裏〕

396 舟となす人もみえこぬ夢はた、何かをしかの声もいとほむ

〔肩付「寛永八三廿五聖廟御法楽」〕

397 さそはる、夢のなこりもおもはぬや秋の夜ふかき小男鹿の声

398 きかはやなまかきのもと鹿の音にとろく夢の世をはのかれて

〔四句「おとろく夢の」〕

鹿声留人

399 からにしきこ、そた、まくをしかなかく野辺の真萩も此比のあき

秋夕

400 さしてうき色はわかれす何事もおもひのこさぬ秋の夕くれ

秋夕雨

401 ふりくるも身をしる雨はうき事のこれやかきりの秋の夕くれ

402 秋は猶春の軒はの忍ふよりみたれてそおもふ夕くれの雨

秋夕露

403 ことはりの袖の露かな岩木たにぬるれはぬる、秋の夕くれ〔二八丁表〕

沢間秋夕

404 ゆふまくれ鳴立秋の沢辺にはうきあかつきのはねかきもなし

〔肩付「寛永十五七廿四禁中」〕

秋夕思

405 身をしほるならひよいかに世やはうき人やはつらき秋の夕くれ

〔肩付「同十四八二」〕

駒迎

406 世に絶し道ふみ分ていにしへのためしにもひけ望月の駒

月

407 もれいてん雲間またれて半天に行もをしまぬ夜半の月かな

〔四句「行もおしまぬ」〕

408 何ゆへとなかめ初けん秋の月待もをしむも心つくしを

〔四句「待もおしむも」〕

409 花ならはうつろふ比の空の月かたふきてしもそふ光かな

410 寛永二四廿出もれいつる今一きはのさやけさに雲こそ月のひかりとはみれ
411 幾里かおなし心にみる月も千々におもひの色はかはらむ(二八丁裏)

横峰待月

412 寛永十六廿四禁中影にはふ松もうつり行秋の月待夜かさなるみねのつゝきに
413 月は猶こなたの峰やへたつらんかさなる山そ待まひさしき

閑見月

414 つくくと月にむかひておもふかなみぬ世のことを語るはかりに
〔四句「みぬよのことも」〕

停午月

415 寛永九廿五聖廟御法衆半天にのほゑはて、そくれ竹のよなかき影も月にすくなき
416 なか空に月やなるらむ呉竹のすくなる影そ窓にうつれる

417 かたふかはくある道そ月も今のほる空なき影をとゝめよ
418 なかは行空にいられて入までも程なき月のおしき影哉

419 此まゝに一夜をあかす月もかな出入山の中やとりして
十五夜月(二九丁表)

立待月

420 正保二八十五禁中御当座もとみしもけふのこよひに似る時はなかはの秋の雲の上の月
421 いく世みん半の秋の中空にさかり久しき雲の上の月

立待月

422 寛永十六廿四禁中日くらしの鳴夕くれのそれならてたちまたるゝは山の端の月
423 けふはまた待程もなし庭に出て立やすらへは出る月影

居待月

424 よりゐても月をこそまで心あてのみねにむかへる楨の柱に
〔肩付「同十六廿四禁中」〕

有明月

425 同十六廿五聖廟御法衆長月もいまいくほとか残る夜のなこりつきせぬ有明の空
426 月はなをさかり過たる有明の影しもふかきあはれそひ行

427 入かたの空たにあるをさしのほる山の端ちかく明る月かけ
428 寛永十五廿四禁中あくるよのしらむはかりや池水の月の氷をわたる春風(二九丁裏)

十三夜月

429 同十六九十三よしやみむ月のかつらを千入までけふしもそむる秋の雨かと
九月十三夜

九月十三夜

430 よしやみよ此雨くものはれすともこよひの月の名やはかくれん
431 長月や此夕しほのみつとなき月もみるめにあかぬかけかな
432 寛永四五十三ひとりあるこよひの月の言の葉にくもる恨を忘れてやみん

月前雲

433 吹かくる雲さへうれしはるゝ夜の月にむかへるにしの山風

雨後月

434 いひしらぬ月そうつろふ萩薄露もまたひぬ雨のなこりに
435 連日雨降て九月十三夜腰暗ける日御当座月すめるこよひのためと雨もよにさしも此比降つくしけん

月前時雨(三〇丁表)

436 慶安元八十五禁中御当座窓の月もりくる竹のさよ風やしくれせぬまも晴くもるらし
437 雪になる山かとはかりしくれこし後しも白き有明の月

暁月厭雲

438 寛永十六後十一廿四禁中はれかたき雲をそおもふむかひみる心の月もすめる暁
海上暁月

海上暁月

439 入はつる都の山の月影にのこるやをきの浪の明かた

〔三句「月影も」〕

440 いさりひも更行なみにかけ消て月のみ白き秋の浦かせ

441 山の端にかくるひはてむ暁も猶すゑとをき沖の月影

〔三句「暁の」〕

山月

442 捲あくるこすのまちかく山も更にうこき出たる月のかけかな

443 月出山
寛永四十九
 半天は行もゆくかは山のはをさし上るほどの月におもへは〔三〇丁裏〕

嶺月

444 ふしのねはなへてのみねの雲霧も麓になして月やすむらむ
 445 みねにおふる松そひさしき秋の月いな葉の山の霧にこもりて

嶺上月

446 九月十三夜御当座巻頭(朱)
 くもりにし半の後の秋の月こよひはみねの雲もかゝるな

〔肩付「九月十三夜当座巻頭(朱)」〕

447 さらしなの秋もこよひはしたはしよ都のみねの月も名たかし

448 夜なかさの程もしられて待いつるみねこそかはれ有明の月

449 すみぬへき山口しるしいてそむる月に尾上の雲もかゝらて

〔初句「消ぬへき」結句「くも、かゝらす」〕

岡月

450 てりまさる影やかつらの紅葉々もさこそやしほのおかのへの月

〔結句「をかへの月」〕

451 木かくれはあやなはて、も秋の月さすや岡への松そ久しき

〔肩付「慶安四八十六禁中御当座」〕

452 月もしれこよひくもらは水茎の岡の葛葉に風もこそふけ〔三二丁表〕

野月

453 むさし野や草の葉分にもえ初て露より下に出る月かけ

454 いかはかりうつろふ月もしけからん雨より後の宮城野々露

455 行てにやむすひよるらん月やとる野中の清水しるもしらぬも

野径月

456 おきあえぬ露はさなから月影に分し跡ある野への通路

〔初句「をきあへぬ」〕

関月

457 月そすむ不破の関屋の板ひさし久しき跡を世々にとゝめて
 458 夜をこめて鳥もやなかむ関の戸はあけし計の月のさやけさ

池上月

459 寛永十六
 月やしるこよひもこよひみる人を待えし宿の池の心は

〔肩付「寛永十六廿十三」〕

460 月こよひすまさらめやは秋も秋みる人からの宿の池水〔三二丁裏〕

池月久明

461 月そすむ千年の秋も池水のそこのさゝれの数にみえつゝ

瀧月

462 寛永十五
 これも又たきなくもかなかえりこん山路はさこそ月もをくらん

〔結句「月もをくらめ」〕

月照瀧水

463 同十三
 月は猶雲のみほにて瀧つせの中にもよとむ影やなからむ

〔二句「雲のみおにて」〕

河月

464 雲の上の影もかよひて天の川なになかれたる月やすむらむ

465 寛永元
 こよひたによとむ瀬もかな飛鳥川なかれてはやき水の月影

466 川浪に月のかつらのさほさして明るもしらすうたふ舟人

〔肩付「正保二九十三禁中御当座」四句「あくもるしらす」〕

467 すみわたる月のかつらの棹さして明るも知ぬ秋の舟人

468 更わたる月やさそひて澄のほる川音たかき夜はのしつけさ〔三三丁表〕

海月

469 寛永十五
 くもらすよむへも心あるあまのかるも中の秋の波の月かけ

海辺月

470 同十三
 和田の原雲るにつゝく夕なみの限りしられて出る月かけ

471 ゆふ煙月に心して須磨の海士の家たにまれに藻塩焼らし

472 心なき海士の小舟もくれふかく帰る波路に月は待らん

〔四句「かへる波路の」〕

湖月

473 晴てよきをなしたくひの秋の月誰面影にほの海つら

〔肩付「寛永十四九廿御当座」二句「おなしたくひの」〕

湖上月

474 しほならぬ浦にそからん煙さへ空にくもらぬ月のみるめは

浦月

475 たましける宿もおよはぬ光かは浦の苦屋の波の上の月（三三丁裏）

〔二句「やともをよはむ」〕

476 吹はらふ波のうき霧ひまそひて浦風清き秋の夜の月

477 思ひやるあかしも須磨も面なれてまたみぬ浦の月としもなし

478 波かくる真砂地とをく影ふけて浦風白き住の江の月

479 暮ぬれは沖の友舟漕わかれをのか浦く月やみるらん

都月

480 こよひたにいかて都の空なから山の端しらぬ月にあかさん

481 けふといへは名にあふ花の都人も月にかたふく心みすらん

〔二句「名におふはなの」〕

社頭月

482 やはらくる光やおなし波間より影あらはるゝ住の江の月

〔肩付「寛永十六六五」〕

山家月

483 山すみの心のちりもはらへとやいさめてすめる柴の戸の月

〔肩付「寛永四九十三」〕

484 山水のすめるやいかに月にこそ浮世なからも世をはわするな（三三丁表）

〔結句「よをはわするれ」〕

485 山ふかくのかれすむ身も月は猶忘れぬ友とむかふよはかな

草庵月

486 かゝれとて嵐あらしやをきしひまおほみ月にさはらぬ草の戸さしは

〔二句「あらしやをきし」〕

庭上月

487 雪寛永十四九十三ならぬ浅茅か庭の露も猶なをはらはん跡はをしき月かけ

〔三句「露もなを」結句「おしき月影」〕

488 よしやみよ名にあふ秋のけふといへはせはき垣ねも月はすむらん

〔二句「名におふ秋の」〕

月前草露

489 影同十三十一廿御当座やとすあさちか露のみたれきて野風にくもる月もこそあれ

〔肩付「寛永十三十一廿御当座」〕

月前萩

490 夕露の光たにある萩か枝にいとゝそへよと月そうつるふ

月下浅茅

491 しつけしな人もはらはぬ露ふけて月影おもる浅茅生の庭（三三丁裏）

〔肩付「寛永十五九十三御当座」〕

492 けふたにもみる人なしにあたら夜の月やふけ行浅茅生の露

493 あさちふのをのゝ篠原をく露もあまりて月の影そこほるゝ

〔二句「おのゝしの原」〕

松間月

494 影うすき月のかつらの初紅葉くるゝ尾上の松にもりくる

月下柞

495 時雨九月十三夜三朱には染あえずともはゝそ原今夜の月の色そえてみん

〔肩付「九月十三夜歟（朱）」二句「染あへすとも」結句「色そへてみむ」〕

月前鶴

496 寛永四九十三くまもなき真砂の月に白妙の色をかさぬるつるの毛衣

月前釣翁

497 おきなさひたれとかむなと秋の水すめるを待て月につるらん
498 そなれてもあはれおきな釣たるゝいとまなくてや月はみさらん

月秋友(三四丁表)

499 月を友といはむもやさし雲の上にすむかすむにもあらぬ我身は
500 うき事もかたりあはする心地してかたらぬあかぬ秋の夜の月

〔四句「かたらひあかぬ」〕

寢覚月

501 夢ならてみし世の事そおもほゆるね覚の後の月にむかひて

月似氷

502 みむ月の影もまことにこほるかと波すさまじき秋の池水

月契多秋

503 今よひたに千世を一夜の月もかなあかす八千よの秋を契らん

〔肩付「慶安三九十三於幡枝御山庄」二句「千よを一よの」〕

残月懸峰

504 待程の心つくしは物かはとおもへはみねに落る月かけ

〔四句「思へはみねに」
ふ殿

寄月旅

505 おもひやるをおもひのこせは古郷もさそな旅ねの月ぞ露けき(三四丁裏)

〔二句「思ひをこせは」〕

506 まくらかるけふりも波も古郷の面影うつす月になしき

507 草まくらねられぬ月に恋侘る古郷人もおもひをこせん

〔二句「ねられぬ月ぞ」
に

寄月旅泊

508 波風のさはきしよりもとまり舟おもひのこさぬ月ぞねられぬ

509 おもひやる心の内みそ友舟のおなしとまりの月にかはらむ

〔二句「心のみちそ」〕

510 うきねする千里の波にこよひこそ都おもはぬ月はみるらん

〔結句「月はみるらん」
め

月前眺望

511 目にちかき山たにあるをいかに又うみみやらるゝ月はすむらん

雁

512 たか方によるとなくらし白雲のうはの空なる雁の玉章

〔肩付ナシ〕

513 来る雁もたか玉つさを世はなへてうつる心の秋にかけまし

〔肩付「寛永廿一五十七禁中御当座」〕

514 海士小舟はつかにそ聞初雁のこゑをほにあくる秋風の空(三五丁表)

初雁

515 折しもあれ秋にわかれて古郷の余波やおもふ初雁のこゑ

516 色に成都の秋の色みんとおもひをこして雁や来ぬらん

〔三句「のへみんと」四句「おもひおこして」〕

517 秋によする心とやみん春霞立をみすてし雁もきにけり

518 秋風を都の空のしほりにて雲路たとらぬかりや来ぬらん

519 したひこし春もきのふの夢の世をかりとなきてやをとろかすらん

〔結句「おとろかすらん」〕

520 古郷の秋にたえずや雁かねの心かろくも出て来ぬらん

〔肩付「寛永九廿五聖廟御法楽」二句「秋にたへすや」〕

初聞雁

521 今朝そなく浦めつらしく秋かせにさそはれきぬる衣かりかね

月前雁

522 とこよ出て雁も来ぬらし秋の空南にすめる月にうかれて

旅泊雁「(三五丁裏)」

523 儀まくら我友舟とおもふまでこゑをほに上て雁は来にけり

524 こゑ聞はなれもたひとて鳴雁の涙くらふる浪まくらかな

山朝霧

525 峰つゝき吹かたみえて朝霧の風の絶間はたえまたになき

霧中山

526 みさほはかり日ものほりけりうすくなる霧にみえすく秋の山のは

527 山もさらにうこくとそみる曙や秋かせなひく霧につゝきて

〔結句「きりにつゝみて」〕

河霧

528 あけほのや山もとくらく立こめて霧にこゑある秋の川浪

529 そことなき霧のうち行波の上に一すちみゆる秋の川水

河上霧

530 水の面に吹あとみえて波の音に川風白き浪のうき霧「(三六丁表)」

〔三句「山本の」〕

531 渡し舟よはふこゑのみとをかて河つらくらき霧の内哉

〔三句「遠からて」〕

堤霧

532 たか中の人目つゝみのへたてとて立かくすらむ秋の川霧

〔肩付「寛永八後十廿五聖廟御法楽」〕

渡霧

533 これも又わたる舟人そこしも行ゑやしらぬ淀の川霧

534 夕霧の立そふ波のわたし守日もくれぬとや舟いそくらん

擣衣

535 まくらかるしるへにややる夕風の便にたくふ里の砧は

536 更行はうつや衣のをさをあらみまとをに聞し声もさやけき

〔三句「おさをあらみ」〕

聞擣衣

537 聞侘ぬたかためならて麻衣うちもねぬ夜の我もつもれば

538 よなくの礎の音よ此比のまかきの花のなにもねられぬ「(三六丁裏)」

539 遠つ人かへらむ衣うつたへにさそなねぬ夜の月になしき

海辺擣衣

540 海士衣なをうちそえてあしのやのなたの釣するいとまなき比

〔二句「なをうちそへて」〕

松下擣衣

541 ひとりのみ夜床にみつの霜をへて誰松の戸に衣うつらん

542 夢そなき松のあらしも音そえてなをうちしきる宿の礎に

〔三句「音そへて」〕

543 常盤山つるに紅葉ぬ松風も秋にしられて衣うつらん

月前嶋

544 侘聞ぬをしとおもふ夜の月影に暁しるき鳴のはねかき

545 此秋の夕にたえず出ていなん月に鳴なく深草のさと

〔二句「夕にたへす」〕

菊

546 花といへとかゝるそかたき色も香もとりならへたる園の白菊「(三七丁表)」

547 ならの葉の世のふることにもれし。梅を忘れし恨なしやは

〔三句「もれし菊」〕

菊花半開

548 又そみむかた枝はをそき白菊も咲しはかりの秋の日数に

549 さきさかぬ色やさなから末とをき千代の半の秋の白菊

菊花盛久

550 ちりうせぬ此言の葉の種となる花も幾世の秋の白菊

551 霜の後の松にしらしな白菊の万代かれぬ秋のさかりは

菊花久芳

552 百草の花はあとなき霜のそこに我はかほにもにほふ白きく

菊久靄

553 百敷や幾世の霜をかさねてかにほふ砌の秋の白きく

菊映月(三七丁裏)

554 くもらすよ雲ゐの庭の秋のきく花もひかりを月にかはして

菊香随風

555 吹しほる草木か上の秋風はしらてやひとりにはほふ白きく

556 花といへとちらぬためしの園の菊あかぬにほひを風にまかせて

菊帯露

557 咲まゝにはなふさおもみをく露もたえぬはかりになひく菊かな

〔四句〕「たへぬはかりに」

露光宿菊

558 あかすみん千世の数かも咲きくのまかきにあまる露の白玉

559 咲花も月も色そふ白きくのまかきの露はよなくのかけ

〔四句〕「まかきの露の」

560 言の葉の露の光も白菊のけふの盛の色香そふらし

561 おもほえず千世もめくらむ白露の光さしそふ菊のさかつき

菊似霜(三八丁表)

562 今朝はまつをく初霜をみる人に咲まとはせる菊の庭哉

山路菊

563 あらぬ世となりもこそすれ菊の露ほさて岡への秋の仙人

河辺菊

564 みつの舟うかへてみはや大井川菊もうつろひさかりなるころ

籬菊如雪

565 咲菊におほへるわたも色そえてまかきにおもる花の白雪

〔三句〕「色そへて」四句「まかきにをもる」

菊粧如錦

566 秋の菊誰あかさりし面影にしきぬものゝ花のいろく

567 江にあらふにしきもしかし咲菊のまかきの花の露の色々

菊送多秋

568 なれてみむ秋を思ふも久堅の雲ゐに匂ふ花の白きく(三八丁裏)

寄菊旅

569 きくさけはけふやかたきたかきにのほるかと折ふしことにおもふ古郷

〔二句〕「けふやかたきに」

寄菊祝

570 くみそえてめくらん御代は長月のけふ九重の菊の扨

〔初句〕「くみそへて」

鳶懸松

571 はひかゝるつたそ色こき霜の、ち松の緑もあらはれぬまで

572 うすくこく露や色とる松かきにゑかくとみえてかゝる鳶のは

黄葉

573 かはかりの心はそめし初紅葉千しほの後の色はありとも

紅葉

574 此比のあさ夕露は染やらて一夜の霜に木々そ色こき

575 おのつからそめぬ梢もうつもれて紅葉にもる、松の葉もなし(三九丁表)

〔初句〕「をのつから」

紅葉盛

576 たのもしなはやまは薄き紅葉々に猶残りある秋の盛は

577 下葉まで今やそむらん露しくれもる山ならぬ秋の木すゑも

紅葉随風

578 梢寛永十七廿七禁中ゆく風にや又やまかすらし時雨染し心木の葉も

〔二句「風には又や」四句「しくれ。そめし」〕

紅葉霜

579 染つくす露より後もをきそひぬ紅葉にあげる霜やなからん

〔肩付「正保三三三禁中御当座」〕

580 なにか世にはてはうからぬ紅葉々は終に染たる霜そくたさん

嶺紅葉

581 よそにみてまつや、みなん染わたす高間のみねの木々の紅葉も

582 むらもみち夜の間にそめて横くものみねにわかる、松の色哉

杜紅葉（三九丁裏）

583 おもひかね梢の露もくれなゐの色にや出る衣手のもり

584 （心して吹なはらひそ木からの森の紅葉々染つくすとも）

池辺紅葉

585 木々の色のうつろふ池にうく鴨やしくれも知ぬ青葉成らん

暮秋

586 色香をはおもひも入ぬ鷹人もさこそは野への秋を、しまめ

〔結句「秋をおしまめ」〕

暮秋鳥

587 露霜のいと、ふか草床あれてくれ行秋にうつら鳴なり

〔結句「うつら鳴也」〕

九月尽

588 みをくらん行ゑならねと名残なく霧なへたてそ秋の別路

秋水

589 岩間行水のひ、きもおのつからすめるや秋のしらへ成らん

〔三句「をのつから」〕

590 うつりけり咲し小萩か影たえて菊の下行水の心は（四〇丁表）

〔二句「咲し小萩は」〕

秋里

591 露もなを身にしむ比のいかならんうらめしといふ里の秋風

592 なもたかくすみのほりてやさらしなの月は里わく光そふらん

593 秋さむきをのかうれへやいひかはすあかつきちかきしつか家く

秋色

594 これそ此秋の色とや白妙の霜にうつろふありあけの月

595 木々はみなうつろひはて、中く（中）に秋こそ松の色もみえけれ

秋旅

596 かひなしや旅の空とふかりかねも我玉章のつかひならねは

597 山ふかみ鹿のこゑ。友として紅葉ふみわくるたひの悲しさ

〔二句「鹿のこゑのみ」四句「紅葉ふみ分。」〕

598 おもひやれ床は草葉を敷佐る旅ねの秋の露のふかさを

秋神祇（四〇丁裏）

599 いなはにもあまる恵の露ならんあまたの神にたつるみてくら

常盤杜

600 ちりねた、月のためさへ色もなき常盤の杜の秋の梢は（四二丁表）

〔題「秋常盤杜」〕

冬

初冬時雨

601 冬来ては木の葉降そふ山風に昨日の秋の時雨ともなし

時雨

602 定なき此身もいつの夕しくれふるもおもへは袖の外かは

朝時雨

603 元和九十六御当座 山めくる時雨もみえて晴くもる雲にいさよふ朝附日かな

落葉

604 そめそめす終にあらしのすゑの露もとの雫のちる木の葉かな

605 寛永十、四廿四禁中 ふみ分る山路にそきく落葉して梢の風のまれになるこゑ

606 ちりそひて山あらはるゝ木の問より紅葉にかへる瀧そをちくる

落葉風（四二丁裏）

607 寛永十四、廿四禁中 風や猶木の葉にあらき夕時雨染残す枝もさそひのこさぬ

608 あたにちる春の花より木の葉までおもふに風のつらさつもれる

〔結句「うさもつもれる」〕

落葉霜

609 正保元十一禁中御当座 かさなるを吹わくる風にけさの霜なかはをきたる落葉もそある

610 いひしらすすゝきましりに霜むすふ落葉色こきあさちふの庭

〔初句「いひしらす」〕

611 朝露に吹やられてやまつ陰も猶霜なからつもる紅葉々

残菊

612 元和 霜を経てうつろひかはる園の菊残るものこる秋の色かは

〔肩付「元和」〕

庭残菊

613 同 むらさきの一本菊そ残ける草はみなからかれし色に

霜

614 元和二十御月次 をく霜に今朝そ跡なき木からしの後まで残る庭の落はも（四二丁表）

615 光もて曙いそくかさゝきのはしにみちたる夜半の霜かな

〔肩付「寛永十四九廿四禁中」〕

616 朝きよめ猶心せよおきまよふ落葉か上の霜もえならず

〔題「庭霜」〕

617 霜に又虫のねよりもさひしさの猶色まさる庭のあさちふ

枯野

618 寛永十三、十六、二百御当座 すゝきのみせめてわかれて花はみなあらぬさまなる霜の野へかな

木枯

619 元和九廿四 はけしくも枝吹しほる木からしにうすき紅葉の色も残らず

620 吹かくるよその梢の木からしにあらぬ紅葉の松に残れる

〔初句「吹かくる」〕

寒草

621 寛永八、廿五御当座 かるゝよりかりもはらはぬ道みえて霜に跡ある野への草村

622 庭の面の千種とゝもにみし人も山里ならぬ宿をかれ行

623 おき残すかきねにあれと枯わたる草葉の霜の色そくまなき（四二丁裏）

〔初句「をき残す」〕

624 同四十五 しはしこそ霜をもしらね冬草はつるにみさほの松かけもなし

625 千種にもなをかえつへし霜枯の中に一花咲るなてしこ

〔二句「なをかへつへし」〕

寒草風

626 冬来ては中くしほるこゑもなし風もたまらぬ萩のかれはに

627 冬かれはお花かうへも萩の葉に秋きゝしよりあらき風哉

寒草霜

628 慶安元十六禁中御当座 朝かほのもろきも千世の白菊もわかすかれのゝ霜のあはれさ

629 いかなれや霜はわかしを緑なる草もかれ生の中にまされる

630 冬かれの浅茅に白き霜の色は秋の花にもおとる物かは

江寒蘆

631 正保三十一、四禁中御当座 江にしけき蘆の葉からす霜の後これもあらはれぬ沖のいさり火

〔結句「奥のいさり火」〕

632 よなくの霜を光にかれわたる蘆間はれ行難波江の月（四三丁表）

氷

633 雪をさへ夜半にかさねて水よりもさむき岩ねの朝水かな

池氷

634 寛永十四廿四禁中
をとかかえていつ吹とかん風わたるあとより氷る池のさゝ波

〔初句「をとかへて」〕

635 なかるゝもうへにはみえぬ池水の猶一すしはこほるともなき

〔四句「なを一すちは」〕

井氷

636 朝なくこほりかさねて汲人の影さへみえぬ山の井の水

〔結句「山井の水」〕

冬月

637 みる人も袖さえとをる小夜風そ木の葉の後の月のくまなる

〔初句「みる人の」〕

638 慶長御当座
隈もなく月そもりくる木枯もまた一ふしはつらからぬまで

〔肩付「慶長―御当座」〕

千鳥

639 浦なみの立わかるゝもをりあるもこゑにみえゆくさよ千鳥哉（四三丁裏）

〔三句「おりあるも」〕

河千鳥

640 寛永六後二五四
千鳥なくさほの川霧立わかれ行ゑも知ぬ妻やとふらん

641 よひあかすこゑさたまらぬ川風にたつや千鳥の友まとふらん

〔初句「よひかはす」〕

岸千鳥

642 松ならぬねにあらはれて小夜千鳥波うつきしに妻をこふらし

水鳥

643 へたつらんうきねの水のこほる夜に山鳥ならぬをしの契りも

寒夜水鳥

644 ひとりぬるをしのおもひやみたれあしのはたれ霜ふり寒き夜床に

霽

645 寛永十五廿四禁中
山かけやくるゝまにくさむからしみそれに雪の色そそひ行

〔初句「山かせや」〕

雪（四四丁表）

646 同十四九廿四禁中
山々のへたてわかれてさやかなる雪は晴ての後にこそあれ

暁雪

647 有明の月とみし間に松竹のわかれぬ色そ雪にわかるゝ

逐日雪深

648 同十六廿四禁中
けふことにをもる枝よりをれそひて松こそ雪のみをつくしなれ

〔肩付「寛永十六廿四禁中」三句「おれそひて」〕

連日雪

649 寛永十三十二廿
都とおもふに雪の晴やらぬ日数はかりはつもるともなき

〔肩付「同三十一廿」〕

行路雪

650 かきくらす雪にもしけき通路は埋もはてす跡もとまらず

冬池雪

651 同十五廿四禁中
みたれふす蘆間や消る冬の池の浪はすくなく積る白雪

〔肩付「寛永十五廿四禁中」二句「蘆間や消間」〕

暮村雪（四四丁裏）

652 同十三十一廿
くれふかく帰るやとをき道ならむ笠おもけなる雪の里人

山家雪朝

653 かくれ家の心も雪に埋れてみし世の友は今朝そまたるゝ

654 山ふかきけさの雪にも埋れぬ心のまつを人のとへかし

閑中雪

655 すむ人の心の外にふりおきし雪や友待蓬生の宿

〔三句「ふりをきし」〕

庭雪

656 晴やらぬ今朝の間をとへふむ跡も降かくすへき庭の白雪

松雪深

657 をち葉せし梢の雪はおもからて松にとのみもつもる雪哉

〔初句「おち葉せし」三句「をもからて」〕

雪庭樹花

658 あかす猶みきりの松の千世もみんちらすは雪の花のときはに（四五丁表）

659 今さらにはほはぬ花の恨あれやみかきの柳雪になひきて

望雪

660 山のはにふりつむ雪もふかきよのやみはあやなき色にさえつ、

眺望山雪

661 めにちかく山も入来る楼の上に千里晴たる雪のさやけさ

〔肩付「寛永十六廿四禁中」〕

662 春秋の山の錦の面影も埋みはてたる今朝の雪哉

夕鷹狩

663 （あかすなを今一よりとかり衣日もおち草をしたひてそゆく）

〔題「夕鷹狩」〕

(鷹狩日暮)

664 鷹かひのけふ計とはおもはぬにかへく空なきかりくらすらん

〔三句「おもはぬも」四句「かへるそらなと」〕

665 行鳥もさやかにみえて白雪そ暮るかりはの光なりける

雪中鷹狩

666 白妙の雪こそ光ゆふかりのあかぬ日影をつきてふらなん

炭竈（四五丁裏）

667 けふりにそ先あらはるゝ年さむき松より奥のみねのすみかま

〔肩付「寛永十三廿百首御当座」〕

夜埋火

668 こゑすなり夜の間の竹をうつみ火のあたりは知ぬ雪や折らん

669 うつみ火のもと心をへたてすやなにはの事も夜はにさためし

枇杷

670 二度はさしにもほはし橘に霜の後なる花そまかへる

671 色こそあれ紅葉ちる日は咲初て我はかほにも花そ匂へる

歳暮

672 なす事のなきにそおもふ行年の今はをしまぬよはひならねと

〔三句「行としも」四句「今はおしまむ」結句「齢ならねと」〕

海辺歳暮

673 いとまなみ今年もくれぬ海わたる世のことわさよ海士のまでかた

除夜（四六丁表）

674 春秋のそれたにあるを行年のけふの別はいふ方もなし

冬天象

675 これも又白きをみればふくる夜の月さえわたる鵲の橋

〔四句「月さへわたる」〕

676 いくたひか時雨の雲をさそひ出て山風くもる冬の夜の月

冬月

677 冬かれはいつれの草に吹もなを荻の上葉にきゝし秋風

〔題「冬風」〕

冬地儀

678 かれはて、中く秋の露よりも色なき野への色そ身にしむ

679 いたはしやあさかせさむき霜の上にかよはぬ人のみえてさひしき

冬浦

680 時雨寛永十一廿五聖御法案こし此夕波にこと浦の雪をよせたる舟もこそあれ

681 焼そへてさすかみふゆの浦風もふせくたよりや海士のもしほ火(四六丁裏)

682 更渡る浦風きよく月さえてまさこにきゆる霜の白鶴

冬植物

683 残りけり松はみとりの洞の中にちさらて友なふ千世の白菊

〔四句〕「ちらてともなふ」

684 霜をかぬ草もありけりくれ竹の千尋ある陰に冬もかくれて(四七丁表)

恋

初恋

685 す糸終に淵とやならん涙川けふの袂をみなかみにして

686 けふそしるあやしき空のなかめよりさは物おもふ我身なりとは

687 もえ初る今たにかゝるおもひ草葉す糸の露のいかにみたれん

忍恋

688 我袖寛永八七廿五の月もとかむなうき秋に露のかゝらぬたくひやはある

689 物おもふ色は中々みえぬへしもれんうき名を歎くかたにも

690 いかさまに又いひなさむ大方の世のうきよりはぬる、袂を

691 いかにせむ物やおもふと人とは、さはく心の色そこたえん

〔結句〕「色そこたへむ」

692 やかてそのならひもそつくひとりある夜半の涙も心ゆるすな

693 折ふしの色にそみえむ月日経は忍ふの山の奥もあらはに(四七丁裏)

694 さられしと思ひもいれし物おもふ心は色にみえもこそすれ

〔肩付〕「慶安三五廿四禁中御当座」

695 わすれ草をしのふとやいふ世に忍ぶおもひはいと、そひもこそせめ

忍久恋

696 かひなしや心にこめし年月をかそへは人もおもひこそしれ

聞恋

697 き、しよりみをとらせぬはかたき世に心浅くも身はまとふらむ

〔二句〕「みおとりせぬは」

見恋

698 我にかく人は心もと、めしをみし面影の身をもはなれぬ

699 おもふそよあしのほのかに聞しよりみしまくれは汀まさりて

700 人はかくそふ身ともかなみしまゝに夢もうつ、もさらぬ面影

〔初句〕「人もかく」

701 うちつけにやかていさともいはまほしあかすほのかにみつの小嶋を

且見恋(四八丁表)

702 わすられぬ思ひはさしも浅からてあさかの沼の草の名もうし

703 おもひのみしるへとならはたのめた、あはれあやなきけふの詠も

通書恋

704 あさくこそ人はみるらめ玉つさに書もつくさぬ中のおもひを

〔肩付〕「慶長廿一御当座」

705 かえりくる程もまたれたまつさのむすひしまゝ、はみるかひもなし

〔初句〕「かへり来る」

706 手習のた、一筆も書そへはいかて待みるかひも有なん

尋恋

707 あらし吹秋より後は床夏の露のよすかも尋侘つ、

〔肩付〕「寛永十五八廿四禁中」

708 つれなさをみはて、やまん契をや年へて祈るしるしにはせん

祈恋

709 いかてかく祈るしるしのみえさらん神はひとをもわかし心を(四八丁裏)

祈難逢恋

誓恋

710 同十五正五聖廟御法楽
よしやその千々のやしろはかけすともたのまれぬへき色しみえなは

711 たのましょ言の葉ことのちかひには中くしるき人の偽

〔三句「ちかひにそ」〕

712 たのまれん心は色にみえぬへしちかふによらぬ契とをしれ

契恋

713 別れてはよもなからへし浮身とも思はぬ人や契る行末

714 心ならぬさはりあらはと此暮をおもひ入る、もおもふにはうき

715 たのましょことより契る言の葉そつゝるにけなる物おもひせん

〔二句「ことよく契る」結句「物思ひけん」〕

716 此暮をまつ契りをけ命たにしらぬ行ゑはあやななにせん

馴恋

717 なれ行を又もみまくのとはかりは思はし物のいとひはつらむ

不逢恋（四九丁表）

718 いかさまにいひもかえましつれなさのおなし筋なる中の恨は

〔肩付「元和九二廿四」二句「いひもかへまし」〕

719 よそにこそあふの松原かはかりによもた、にてはあらしつれなさ

馴不逢恋

720 つれなさの心みはて、今更におもへはおなし身さへくやしき

契待恋

721 たのめしをたのまは今はたのむなよ月出てとは人も契らす

〔二句「たのまは今は」〕

逢恋

722 あれはありし此身よいつのならばしに世をへたてんも今さらにうき

〔初句「あはれ。ありし」〕

723 あふ坂の露におもへは袖ぬれしあはての浦の浪は物かは

稀逢恋

724 寛永十四丁四
あやにくにくらふの山も明る夜をまれ成中にかこちそえつ、

〔結句「かこちそへつ、」〕

725 同十八二廿四
いかにせむ年にまれなるあふ事を待し桜に人もならば、

726 たまさかのあふ夜なれはとけやらぬ恨を人にゆるすさへうき

別恋

727 待えてそいそき立らん鳥かねをおなしつらさにいひなすもうき

惜別恋

728 寛永十一二廿五聖廟御法楽
明る夜の程なき袖の涙にやなをかきくらすきぬくの空

〔肩付「寛永八十一廿五聖廟御法楽」〕

729 と、めてはゆかすやいかに我こそは人にのみそふ今朝の心も

730 くりかえしおなし事のみ契るかな行もやられぬ今朝のわかれに

〔初句「くりかへし」〕

731 くれはとも何かたのまん起いつる此朝露は消も残らし

〔結句「きえも残らす」〕

732 誰ための命ならぬとおもふにもみはてぬ夢の今朝のわかれ路

〔二句「いのちならぬと」〕

深更帰恋

733 寛永十四丁二四
待出てかへる今夜のつれなさは人にみはつる有明の月（五〇丁表）

〔二句「かへるこよひそ」〕

734 有明の月はつれなき空もなしみはて、帰る人の心に

後朝恋

735 身にそへて又こそはねめ移り香もまたさなからの今朝の袂を

顕恋

736 寛永十五丁四禁中
つ、みこしおもひの霧のたえくに身は宇治川のせ、のあしろ木

頭絶恋

737 絶ぬへきそれをかこと、思ふにはうき名も人やもらし初けん

738 たえぬともしのひし程の世なりせは人わらへなる身とはなけかし

増恋

739 いかにせむふるや涙の雨もよによとの沢水まさるおもひを

〔三句「雨もよに」〕

逢増恋

740 かの糸のあはすはかゝるけちかさのにくからぬふしもおもひみたれて〔五〇丁裏〕

逢後増恋

741 あひもみぬさきならばこそこひせしの御祓もつらき我おもひ哉

被厭恋

742 つけはやななきたるあさの我袖につゐに身をしる雨はしけしと

変恋

743 つらくてもさらははてしとかはり行心をしゐて頼むはかなさ

久恋

744 つらさこそ色もかはらね白玉とみえしはいつの涙成らん

〔結句「なみた成けん」〕

745 今までにむかしは物をとはかりも恨みぬ身をは恨やはせぬ

旧恋

746 さきのよの夢を忘れぬ契かたととる計の中の年月

〔肩付「寛永十二廿五聖廟御法楽」〕

747 おもひやれあはぬ月日にいつしかとむかし語りもつもる恨みを〔五二丁表〕

遠恋

748 立かへりやかてとおもふ中道にあはぬ日をほくつもらむもうし

〔四句「あはぬ日おほく」〕

749 みねの雪分こし道のわりなさも浅きかたにはいか、思はむ

750 忘れすはおもひをこせよ海山も心の中にさはる物かは

751 行通ふ心計そ岩ねふ山はとをくてちかき道なる

〔三句「岩ねふむ」〕

752 宮のうちを千里とたにもおもふ身のひなにうつるふ程をしらん

近恋

753 つらきかなた、はひわたる程にたにおもはぬ中の遠き絶間は

隔川恋

754 うしつらし契りにかけんにほ鳥のおき中川を君にへたて、

片思

755 などか我つらき心のつらからぬよしあひおもふ道はなくとも〔五二丁裏〕

〔肩付「寛永十二廿五聖廟御法楽」〕

756 よしや人あひおもはすはせてわれつらき心をつらしともみよ

757 恋侘る人の歎を身にしらておもひ知ぬもうき心かな

758 我のみの涙そつらきはねかはす鳥のためしもある世に

思

759 おもひ草思ふも物をとほかりにをさふししけく露そこほる、

〔四句「おきふししけく」〕

760 さまゝにしにのふもちすりみたる、も誰ゆへあらぬおもひとをしれ

761 くりかえしかたき世までもまよふへきおもひを何としつのをたまき

〔初句「くりかへし」〕

難忘恋

762 おもふにはなけのなさけもいかなれやそその事のうきに紛れぬ

763 年月をへたてしうさもうさなからみしは昨日の面影にして

恨恋

764 恨みしよ言葉の限りつくすとも一ふしをたにえやははるけん〔五二丁表〕

765 いかならむ此一ふしの恨ゆへつらき心の奥もみえなは

766 情こそおもふにうけれつらしとておほよそ人に恨やはする

〔結句「恨やはある」〕

人伝恨恋

767 我うらみ世の空ことにいひなして聞もいれすとかたるさへうき

〔二句「よのそら事と」^に〕

768 かたはしもまねはし人の言つてをたゝなをさりの恨とやきく

恨身恋

769 おもへ人うき身のとかなしはてゝ恨みぬまでの中の恨みを

〔肩付「寛永十七廿二」〕

770 つるにその里のしるへも海士のかる藻に住虫の名にも悲しき

771 思ふにはうきもつらきも誰ならぬ恨のはてそいふ方もなき

絶恋

772 よしやみやよはかなきふしそうきなからえしも忘れぬ人もこそあれ

773 うしや世に絶たるをつく道はあれと分し浅茅の露のこらぬ^(五二丁裏)

〔結句「あともこのらぬ」〕

経年恋

774 さりともとなくさめきぬる年月に中くつらき限りをそみる

春恋

775 いかにせむとはれん春もたのまれぬ身は鶯の古年の宿りを

夏恋

776 明やすき空そわりなき秋の夜もあふ人からはをしむ習を

〔結句「おしむならひを」〕

777 夢にさへあはれあふ夜もなつ衣かえしもあえず明るしのゝめ

〔四句「かへしもあへす」〕

夏忍恋

778 おもひ侘きゝもあはせむ忍ひねを我にかたらへ山ほとゝきす

779 身のうへにかけてもかなし夏虫のねにたてぬしもゆるおもひを

夕恋

780 此くれのさはる恨をかきやるも待らん方はつらしとやみん^(五三丁表)

781 おもひやれ人の心の秋ちかみとはぬ夕の露のふかさを

夜恋

782 つくくゝと物にまきれぬ思ひのみまさきのつなのよるそ侘しき

783 なこりなをあふとみえつる夢よりもさたかにむかふ夜はの俤

784 なかしもおもはてたれか一人ねの明る間をそき夜をゝしむらん

〔結句「よをおしむらん」〕

恋地儀

785 物おもふみなかみよりそ世とゝもに絶ぬ涙の瀧の落来る

〔結句「瀧もおち来る」〕

関路恋

786 したひこし面影ながら鳥か音にいそく関路のならひさへうき

恋涙

787 別れ行我袂には色かえて身のみ歎く涙さへうき

〔三句「色かへて」〕

寄月恋^(五三丁裏)

788 面影のわれにむかひてかきくらす人はさたかにみむ月もうし

789 たのめしはあらずなる夜に面影の昔おほゆる月さへそうき

〔二句「あらずなるよに」〕

790 諸ともにみしよ忘れぬ面影に霧ふたかりて曇る月哉

791 たのめこし人の心の秋立て木の間の月をみぬ暮もなし

寄月尋恋

792 するへなきやみにそたとる恋の山かくるゝ月を猶思ふとて

寄雲恋

793 契りた、思ふにもうき中空に雲の跡ある人の言の葉
同四九十一

794 はれ間なきならひよいか雲ならぬ恋はむなしき空にみちても
同十三十一、廿六、二百首御当座
 「初句「契りた、」三句「中空の」四句「雲はあとある」

795 人のためはけふりをたちし此比のおもひもしらぬおもひ悲しき
正保三、廿八禁中御当座
 「二句「けふりをたちし」

796 煙たに人にしられぬ下もえを里のしるへの海士のもしほ火(五四丁表)
慶安四、廿四禁中御当座
 797 (思ふ方のかせにはさしもなひくらんうしやみさほの松のけふりも)

寄露恋

798 おもひやれ人の心の秋もあき露もそらなきつゆの袂を
寛永十四、八、廿三
 799 なひくかともみむふしもかな竹の露のまるひあふまては契りなくとも
慶安三、五、九禁中御当座

寄夕恋

800 おもへひとあすはとふとも草の原此ゆふ露の消ものこらし

寄山恋

801 しられしなあはてうき身のなけきこる山としつもる思ひありとも
 802 つれなきもつるにさはらぬ道しあらは心つくはの山もたのまむ
 803 人心みはてはわれもやみねた、よしうき恋の山つくるとも
 「肩付「正保二、十五禁中御当座」

寄野恋

804 かりわたに人はこさらむこひ草のしけき夏野に何たくふらん
寛永六、六、五
 「初句「かりにたに」

寄瀧恋(五四丁裏)

805 せきあえぬ袖のたきつせ行すゑにわれてもあはむ契りたにあれ
 「肩付「同十六、廿四禁中」初句「せきあへぬ」

寄湊恋

806 人心うかへる舟のよるへとも我湊江をいかてたのまむ
寛永十六、六、五

寄海恋

807 みちひなきならひもうしや敷妙の枕の下のしほならぬ海

寄草恋

808 道のたゆる浅茅か庭はまくす葉をかえす秋風吹と伝へよ
寛永十四、一
 「初句「道たゆる」四句「かへす秋風」

寄草別恋

809 別れ行此道芝にくらへみよあはてこし夜の露は露かは
同十四、廿五聖廟法楽
 「肩付「寛永十四、廿五聖廟御法楽」

寄菊恋

810 きくのことうつろふからに色そは、人の心も秋もうかりし
 「二句「うつろふからに」

寄葛恋(五五丁表)

811 つれなきに我やまくすの恨さへ今更ふかき露をしらなむ
 「肩付「寛永九、八、廿五聖廟御法楽」

寄木恋

812 人心花にうつろふならひこそ我かたはらのつらき太山木
寛永十四、二、晦

寄鳥恋

813 槇の戸をた、けと人に契りをかむ水鶏鳴夜は聞もとかめし
同十六、五、廿四禁中
 「二句「た、けは人に」

814 うき中は雁よつはめよ羽をさへならへむと契る人もこそあれ
同十六、九、四禁中
 「肩付「同十六、九、四禁中」二句「雁よつはきよ」

寄猪恋

815 みせはやなふするのかるもかきたえてこぬ夜の床の露のみたれを
同十六、六、廿四禁中

寄虫恋

816 おのか名のこてふに似たり折かさす花に宿りてむすふちきりは
同十六、三、廿四禁中

「初句」をのかなの」

寄商人恋

817 あはれ身におはぬ歎やあき人のきぬきたらんかたくひさへうき（五五丁裏）

寄枕恋

818 我もまたかれやはてなん恨侘うちもぬ夜のつもる枕は

寄秋枕恋

819 うしや今誰たまくらにいとふらん身はならはしの閨の秋風寛永十七廿五聖廟御法業

820 露けさのことはり過てひとりぬる夜はの枕は浮はかりなる

寄菴恋

821 しれかしなどはれぬ床の小菴に待夜もちりもつもる恨を

寄衣恋

822 かえしてもみる夜まれ成夢そうき中にあるたにうとき衣を

「初句」かへしても」

823 いかにせむ我恋衣はる雨にぬれしはかりの涙ならずは寛永十六廿四禁中824 みるめなき恨よりけに中くにしほやき衣ぬれそふもうし同廿一廿禁中御堂座825 かえしても夢たにうときさよ衣つらからぬ中にいつか恨みむ（五六丁表）

「初句」かへしても」

826 しらさりしみるめなきさそしのはる、塩焼衣ほさぬ恨を

寄絵恋

827 かひもあらしかたちはさこそうつすとも月は光をえしもか、ねは寛永五八廿四禁中

寄糸恋

828 いは、やな下の恨のふしおほきしつかしけ糸くりかへしつ、寛永十四十一廿四禁中

「肩付」同十四十一廿四禁中」

寄名所恋

829 あふ事を我まつ山はあたにのみいく年なみのこえむとすらん（五六丁裏）

雑

雲浮野水

830 白雲も手にまきはかり影みえてす、しくすめる野へのまし水

橋雨

831 行人も笠とる計ふる雨を音にのこせる浪の川はし

832 さみたれば堤の上も行水に浮橋ならぬ川橋もなし

「四句」うきはし橋ならぬ」

833 行人の跡たえはて、板橋の霜よりけなる雨のさひしさ寛永十七廿五聖廟御法業

834 真木の板も苔むすま、に村雨のか、れる橋の音たにもせず

「二句」こけむすま、に」

835 うちしめる雨さへおもくをふ柴にかはらぬ橋やふむもあやうき

「三句」おふ柴に」

塩屋煙

836 藻しほ焼海士の家たにまれにして煙さひしき須磨の浦なみ寛永六後一廿四837 鳥かねに起いつるよりよしあしのわかる、道をおもはさらめや同十四廿四禁中

「肩付」寛永十四廿四禁中」

838 つくり絵を霞やのこす咲比はまた遠山の花の千枝に正保四正十八御堂座

遠山如画図

839 これもこゑある絵とや夕霞山のとをく帰るかりかね

「肩付」正保四正十八御会始」

840 亀のうへのうつし絵なれや千々の秋の雪をふくめる春の山のは

「初句」これも又」四句「山の端とをく」

841 すむ人は影たにみえぬ澗の戸の水や岩もるあるし成らん

澗水

842 薪こり水くむ道のたよりをもちかくやしむる谷の下谷庵方

名所橋

「結句」谷の下庵」

843 世をわたる道もこ、より行帰る人や絶せぬ淀のつき橋

水石契久

844 天か下恵む心も行水のもるてふ石をためしにやせむ」(五七丁裏)

「肩付」寛永二正十九御会始」

845 山は石川は帯とそむすひをか君と臣との中の契りを

池水似鏡

846 のとけしな世にはにこれる水もなき春をうつせる池の鏡は

847 たくひなや柳のまゆも春の池の花のか、みに影をならへて

瀧

848 松のこゑたきつ岩なみひ、きあひてす、しくもあるか山の下陰

849 いはかねのこなたかなたにわかれてもよりあふ末やたきの白糸

「初句」いはねの」

飛瀧音清

850 水上は山かせをちて松のこゑ瀧の響といつれ高けん

「二句」やまかせおちて」

851 雪とくる山のたきつせ落そひてあらぬこゑにも春をわくらむ

山中瀧

852 岩波を梢にかけて松かせもさらに音なき山のたきつせ」(五八丁表)

853 涙にそやかてかりねの夢覚るみ山よふかき瀧つせの声

854 水上は梢のちりやちりひちのつもりて高き山の瀧つせ

「二句」梢の露や」

855 雨の、ち山のみとりにあらはれて清く涼しきたきの白糸

名所瀧

856 世にひ、く名さへそ高き白雲の上より落る布引の瀧

857 白玉のまなくみたれてみるもきくもさなから雨とふるの瀧つ瀬

海路

858 古郷をおもふやをなし過行をとみにみくる沖つ舟人

「二句」思ふやおなし」

古郷草

859 あれまくも春そおもはぬ古郷の垣ねにしけきつはなすみれに

「題」故郷草」

閑居

860 心よりしつかならずはしつかなるかくれ家とてちりの世中」(五八丁裏)

861 のかれこし心にも似す夢はなと猶おもはずに世にかへるらん

閑居待友

862 今さらにとふへきたれをまつの門さすかに三の径を残して

草庵灯

863 草の戸のすきまの風のとしひの消やらぬ程と住や誰なる

864 草の庵のくちなん後の螢よりかすかに残る夜半の灯

古寺松

865 法のこゑにそれもやかよふ高野山あかつきふかき庭の松かせ

古寺鐘

866 小初瀬や紅葉ふきをくる山風に声も色ある入相のかね

867 鐘のこゑにけふはあすかの明日といひし我をこたりも今そおとろく

「二句」けふあすかの」四句「我おこたりも」

山家」(五九丁表)

868 先たちて入し心そすみぬへき今すみそめる山の奥にも

「四句」今すみそむる」

869 よしやとへおもひしよりも山里の住うからぬもいはまほしきに

870 おもひ入心の奥のかくれ家にすまはや山はよしあさくとも

871 法に入道とをからしをこなひも物にまきれぬ山をもとめは

山家煙

872 冬ふかみさらに折たく柴の戸のけふりをそえてさゆる山風

〔四句「けふりをそへて」

田家

874 はかなしなかりほならぬもかりそめすかこふ田中の賤か家ゐは

875 もるこゑも水のひゝきも絶はてゝこほる冬田の庵のさひしき

876 秋風の宿りとやなすも人もかりていなはの小田のかりほは

山家燈

873 柴の戸にたれかしこをさ友としてふみにむかへる夜はのとしひ（五九丁裏）

〔二句「たれかしこさを」

田家鳥

877 おとろかす跡よりやかて帰りきて門田の鳥そ人にまちかき

878 今こそと門田の雁のこゑの中に軒のつはめもおもひ立らし

幽径苔

879 誰はらふみちともなしにおのつから苔にちりなき松の下陰

〔三句「をのつから」

岡篠

880 かの岡にもゆる草葉のうらわかみ霜にもかれぬ小篠をやかる

庭竹

881 くれ竹の園生にのこせよゝの道に老ぬる松の庭のをしへを

窓竹

882 いやたかく生そふまゝに大空もおもふはかりのまとの呉竹

883 ことし生のかげさへしけく呉竹のは山もまとにみえずなり行（六〇丁表）

竹不改色

884 これを世のすかたともかなくれ竹はすくなるものゝ色もかはらぬ

竹契週年

885 もろこしの鳥も住へく呉竹のすくなる世こそ限りしられぬ

〔肩付「寛永三九八二条亭行幸」

水樹佳趣多

886 白玉の数にもしるし池水のたきつ岩根の松の千年は

〔肩付「寛永九正十九御会始」

887 ふりせずよ柳のかみも若かへる池のかゝみの春の面かけ

888 青柳の緑をうつす波のあやにはへある池のをしの毛衣

889 ことの葉のたねならぬかは水遠く山つらなりて霞む梢も

松

890 紅葉こそ余所にもおもへ松風の声には秋をわかぬ物かは

891 百敷や松のおもはむ言の葉の道をふるきにかてかへさん（六〇丁裏）

892 百敷やうえし我世もおもふには幾程ならぬ松の木高さ

〔二句「うへし我よも」

嶺松

893 つもりしもつゐにあらしの枝はれて雪に色そふみねの松原

894 はらふよりつゐもやらて雪にさへつゐにつれなき嶺の松かせ

895 かすむかとみねの檜原はくもる日も松のあらしもひとりつれなき

浦松

896 松かせも秋にすゝしく音かえてうらめつらしき志賀のからさき

〔三句「音かへて」

897 和哥の浦やみちくる八重の塩風に松もや波の音をそふらん

庭上松

898 家々の松の言の葉散うせぬ庭のをしへも幾世ならまし

〔三句「うせぬ」

899 此宿にけふをはしめとかきつめて千世もつもらん松の言の葉

「砌松」(六二丁表)

900 百敷のふる事かたれ我みても久敷代々の松はしるらん

901 も、しきの砌の松の相生にちりうせぬ種や世々の言のは

松有歓声

902 松に吹もやはらく国の風なれやすくたのしむ声に通ひて

903 風ふけは空に知れぬ白雪のりちにしらふる松の声哉

名所松

904 百しきや誰をしる人高砂の松のふりぬるむかしかたりも

門松

905 あはれたれまつこともなくさしこめて世をすきたてる門の明暮

麓柴

906 日をさふる山のふもとのす、しさに真柴かたしき暮すころ哉

907 緑なるふもとの野へを分ならずならの葉柴の露の涼しさ」(六二丁裏)

鶴伴仙齡

908 仙人のなにあふ宿そ千世かけてこ、にも契れつるの毛衣

「二句「なにおふ宿そ」

909 万世を三の嶋なるあし田鶴のこ、にも通ふ道はへたてし

名所鶴

910 すむ鶴に問はや和哥の浦なみを昔にかえず道はしるやと

「肩付「寛永十五七廿」四句「むかしにかへす」

関鶏

911 名残あれや鳥がなくねに起出る関のかや、の月を残して

白鷺立汀

912 白妙の池のはちすのまたさかぬ汀のさきは色もまかはす

馬

913 おもふそよ千里の馬をたつねてもしるらん人はさてもなきよを

「对亀争齡」(六二丁表)

914 万代をこ、にかそへて百敷の外にもとめぬ龜の上の山

筏

915 心あれや散行水をせきとめて紅葉々なからた、むいかたし

「肩付「寛永九十廿五聖廟御法楽」

暁鐘

916 おとろかすあかつきことの鐘の声に猶さめはてぬ夢をしそおもふ

夕鐘

917 春秋の幾夕暮をしみきてかねもつきぬる年をつくらむ

「肩付「寛永十四二十」三句「おしみきて」

918 さすか身はおとろきなからつきはてぬ願もかなし入相のかね

薄暮鐘

919 声の中に花散山のさひしさもみるはかりなる入相のかね

寺近聞鐘

920 さめぬへき夢路そとをき明くれの寺はこ、なる鐘の声にも」(六二丁裏)

浦舟

921 難波かたうら浪とをきあしまよりおなし一葉とみゆる釣舟

漁舟連浪

922 海士人の一葉にまかふ舟よりもかろく身を、く波の上哉

923 明たてはをのか浦くこき出て世をうみ渡るあまの釣舟

野寺僧帰

924 鐘のこゑを我住かたと帰るなり野寺の門を月に敲きて

旅朝

925 たひ衣朝立野への笹まくら一よのふしも誰かおもはぬ

926 おもひやれ古郷とをくかりねしてさ、分るあさの袖の露けさ

927 朝またきまたき起いてぬ何にかは心もとめん旅の宿りは

旅夜（六三丁表）

928 おきそふや古郷とをき露ならんさゝのまくらの一夜くくに

〔初句「をきそふや」〕

旅行

929 行くくてもおもへはかなし末遠くみえし高ねも跡の白雲

930 みやこにときけは賤さへ一筆の便にたのむ旅の道哉

旅行友

931 おもふよりとをく来ぬらし旅衣分る夏野々草高くなき

〔結句「草たかくなる」〕

旅宿

932 何かうき草のまくらそ古郷と思ふもかりの宿ならぬかは

鞆中関

933 都人あかすわかるゝ夢路にはあやなまさしき関もかためす

旅泊雨

934 夜の雨をうき物としも聞わかすさはきなれにし波の枕は（六三丁裏）

旅泊夢

935 舟人のいつからとまり波なれてみるらん夜はの夢も悲しき

936 波さはくうきねのまくら又うきぬ都の夢のかへるなこりに

眺望日暮

937 釣舟はみえすなるよりみえ初て暮行をきに近き漁火

〔肩付「寛永十六六五」四句「くれゆく奥に」〕

川眺望

938 いにしへの契りにかけし帯計一筋白き遠の川なみ

939 ふかくなる青葉の山の麓川夏しも白き波の色哉

940 こりつめるしはしかほとも行かへる世のいとなみや宇治の川舟

海眺望

941 面かけを浦の煙に先たてゝかすまん春もちかのしほかま

〔肩付「寛永十六二十二廿四禁中」四句「かす。む春も」〕

942 海士小舟初雪なれやわたつみの波より白き沖つ嶋山（六四丁表）

湖水眺望

943 わたつみのかさしにはあらて白妙の花の波よる志賀の唐さき

〔結句「しかのうらかせ」〕

望遠帆

944 するやいかにかこき行舟の友からすそれたにみえぬ波のあはれを

945 みをくるをみるやいかなる行舟はまた消ぬまに浪そへたつる

〔四句「また消ぬよに」〕

独述懐

946 へたてなくいひむつふとも世中におなし心の友はあらしな

述懐非一

947 道くそのれひとつたにいにしへのはしかはしにもあらぬ世にして

948 いかにして此身ひとつをたゝさまし国を治る道はなくとも

寄鏡述懐

949 うつしみぬ我や何なる世中に人のかゝみは今もこそあれ（六四丁裏）

懐旧

950 ひらけなを文の道こそいにしへのかえらむ跡は今ものこさめ

〔四句「かへらむ跡は」〕

951 みすしらぬむかし人さへ忍ふかなわくらき世をおもふあまりに

寄舟無常

952 世中の波のさはきもいつまでの身のうき舟よさもあらはあれ

寄橋雑

953 おもへ人木曾のかけ橋それならてうき世を渡る道もあやうし

954 波の音に聞つたへてもおもふそよふみはいかに天の橋立

寄衣雑

955 うつりかはる世のならひをも折くにかふる衣の色やみすらん

速

956 あつさ弓寛永九十一廿五聖廟御法楽にも過て年毎に古年にさへ似す暮る年哉(六五丁表)

957 吉野川かけはなかれて行月の雲のみをさへよとむともなし

〔四句「雲のみおさへ」結句「よとむせもなし」〕

958 立行もあとになるみの浜千鳥しほあひはやく波のさはきに

相坂関

959 関守はうちもねな、ん人心すくなる折にあふ坂の山

鳥羽

960 をさまよふ霜の色のみ白鳥のとはたの面の冬そさひしき

961 淀川や波よりしらむ明ほのに鳥羽山松の色そ夜ふかき

鏡山

962 山の名のか、みをかけて夕日影空にか、やく雲の色哉

963 こほるをやくもるといふらん鳩の海の水の鏡の山もうつらす

折句
いへつくりたくひなし

964 いく世をへ月もみるへくりちのうたくりかえしうたひなをかけもよし(六五丁裏)

〔四句「くりかへしうたひ」〕

物名
かにはさくら こそくら

965 はつはなもさこそほかにはさくらめとこの色のこそくらふへしやは

〔二句「さこそ外にも」は〕

伊勢

966 うこそなき下つ岩根の宮柱身を立る世々のためしならずや寛永十六七廿四禁中

967 にこりなき心の道をたてそめしいす、の川の宮はしらかも

社頭

968 うつしてもみはや宮ゐにあらたむる賀茂の川霧ふるきためしを賀茂社造替有比

〔二句「みはや宮ゐるも」〕

969 みてもおもへすなをなるしも陰たかき内外の神のかやか軒はを

〔二句「すなほなるしも」四句「内外の神や」の〕

社頭暁

970 あかつきの霜もをくかと神垣や榊葉白き夏の夜の月

社頭松久寛永十五五七

971 住よしやいつの御幸にあひをひの松はしるらん世をもとは、や(六六丁表)

社頭祝

972 代々かけてたのむ北野々一夜松ひとつふたつの道のためかは同廿二廿五聖廟御法楽

〔肩付「寛永廿二廿五聖廟御法楽」〕

973 一夜松十かへりの花も百千度猶さきそはむ宮ゐる久しき

寄社祝

974 九重同九六廿五聖廟御法楽のためならぬかは守れた、天津社も国つやしろも

〔肩付「寛永九六廿五聖廟御法楽」〕

975 まるより代々にた、しき風もあれや北野々松の言の葉の道

寄月神祇

976 月よみの神の恵のつゆけさはこよひの秋そ光ことなる

〔三句「つゆしけき」〕

寄花神祇

977 あかすとや神もうくらむ色も香もふかき心の花の手向を(六六丁裏)

〔肩付「同八三十四詩哥御会」〕

釈教

978 ふかくいるもあさしとをしれ法の道山の奥なる麓ならずは

春釈教

979 霜なから消も残らし春日さす野への若なのつみは有とも

〔題「春尺教」〕

心無所住而生其心

980 ぬしやたれとは、こたへよあまのこの宿もさためぬ波の浮舟

未顕真実

981 たえなれやつるに四十の霜の後世にあらはる、松の言の葉

慶安三十一本源白性院四一周忌追善左府勸進

〔初句「たへなれや」二句「つるに四十年の」〕

982 十といひて四方の山辺の春にたにみさりし法の花そひらくる〔六七丁表〕

在於閑処

983 しつかなるみ山の松のあらしこそ心につもるちりもはらはめ

984 (をのつから月もくもらししつかなる此山水のすめる心に)

如是我聞

985 我聞し人の心を種として世々にや法の花は咲らむ

照于東方

986 いちしるし妙なる法にあふ坂の関のあなたをてらすひかりは

東照権現十二回忌五十貫巻頭

無諸衰患

987 あふけ猶八嶋の外も波風のうれへなしてふ法の誠を

988 たのもしなあまねき露の恵かは花もとろへす蝶も愁へす

〔四句「はなもおとろへす」〕

啐啄同時眼

989 さやけしなかいこを出る鳥かねにやふしもわかすあくる光は

啐啄同時用〔六七丁裏〕

990 立あなくかいこの鳥の翅こそ山もさはらす海もへたてす

〔結句「海もへたてね」〕

空門極品

991 むなしきか色なき色は誰かみむよしみむ人もみぬ世ならすは

992 秋霧の立もおよはぬ大空のくまなき月はみる人もなし

〔二句「たちもよはぬ」〕

世尊拈華迦葉微笑

993 糸みのまゆひらけし花は梅か桃か誰しらさらんたれしらすとも

徳山入門便捧

994 あかしかた迫門こす船をうつ波に巖も山も残る物かは

僧問趙州狗子還有仏性也無趙州云無

995 かくれ家のいつくかはある糸のこ草それほと、へは山なしの花

僧問趙州如何是祖師西来意州云庭前柏樹子

996 そめなさはうしや西より来る秋の色はいろなき庭の梢を〔六八丁表〕

高亭隔江見徳山便曰不審徳山拳扇

招高亭忽然大悟

997 かせ清し山つらなりて水とをき入江の波の白きあふきは〔六八丁裏〕

寄道慶賀

998 おもふ事の道々あらん世の人のなへてたのしむ時のうれしさ

寛永五正十九誓御念始

999 行人の遠しともせず東路の道のはてまで治れる世は

〔二句「遠しともせし」〕

祝

1000 たえせしなその神代より人の世にうけてた、しき敷嶋の道

祝言

1001 今こそと袋にはせめあつさ弓八の糸ひすもみな、ひき来ぬ

元和九七十二御当座

1002 まもるてふ五の常の道しあれば六十あまりの国もうこかす

1003 おさめしる人の心よ戸さしせぬ民よりも猶うれしと思ふ

寄日祝

1004 天つ日を見るかことくに恵ある世とたに知ぬ時のかしこさ

寛永十六六二

1005 尽せしな天津日嗣もくもりなく出入かけの照す限は〔六九丁表〕

同十六九廿四禁中

夏祝言

〔肩付「寛永十六九廿四禁中」〕

1006 今こゝに人の国まてたゝきこむと君にしらする水鶏とそきく

〔二句「ひとの国さへ」〕

1007 五月こはうえむ田つらそ水ひろき民の心に雨をまかせて

〔二句「うへむ田つらそ」〕

冬祝言

1008 つるかめのしらしな君か万代の霜の白菊残る日数は

〔初句「鶴亀も」〕

1009 松にすむ鶴の毛衣冬来てやをきまさる千世の霜をみすらむ

寄道祝

1010 九重の縄たゝすなり木の道のたくみも世々の跡を残して

1011 行人のみな出ぬへき道ひろく今も治る国のかしこさ

寄国祝

1012 ためしなや他国にも我国の神のさつてたえぬ日嗣は

1013 田かえすをはふく春にそあらはるゝ民やす国のもとつ心は〔六九丁裏〕

〔初句「田かへすを」〕

寄松祝

1014 ちりうせぬためしときけはふるき世にかへるを松の言の葉の道

寄亀祝

1015 九重にうつせる亀の山はけにしらぬ千とせの後までもみむ

1016 おもへたゝたれもかくしてむつかしき世の外にへむ亀の齢を

為君祈世

1017 千世もしるしみかきの竹のふしておもひおきてかそふる人の誠に

〔肩付「寛永十九正廿三御会始」四句「をきてかそふる」〕

1018 やすかれと万の民をおもふまで代々の日嗣を祈る外かは

1019 九重の君をたゝさむ道ならて我身ひとつの世をは祈らす

寄世祝

1020 祈りをく千とせは代々につきもせしありとある人のひとつ心に

〔肩付「寛永十四十六」〕

1021 世をは今誰おろかにも祈おかむ恵の露のかゝらぬもなし〔七〇丁表〕

〔二句「たれをろかにも」三句「いのりをかむ」

〔白紙〕〔七〇丁裏〕

九月のすゑつかたおもひもあえす色にうつろひ

しはたゝ夢の中なからさむへきかたなきか

なしさに仏を念し侍りけるつるてに諸法実

相といふ事を初にをきてつたなき言の葉

をつゝり聊愁歎のおもひをのへ侍るならし

1022 白雲のまかふ計をかたみにてけふりの末もみぬそ悲しき

〔詞書「九月のすゑつかたおもひもあへす…」〕

1023 よそへみるたくひもはかな朝顔の花の中にもしほれやすきを

1024 ほし侘ぬさらても秋の露けきに涙しくゝすみの袂は

1025 うつゝある物とはなしの夢の世にさらはさむへきおもひもかな

1026 しらさりきさらぬ別のならひにもかゝる歎を昨日けふとは

1027 つかふへき道たにあらはなくさめてとまの雫を袖にかけても

1028 さまゝにうつりかはるもうき事は常なる物よあはれ世の中〔七一丁表〕

1029 うけつきし身のおろかさよ何の道もすたれ行へき我世をぞ思ふ

〔二句「身のをろかさよ」

八月中旬のころ中院大納言武家の勘当の事

ありて武州に有比つかはさる

1030 おもふより月日へにけりひとひたにみぬはおほくの秋にやはあらぬ

〔三句「ひとゆたに」

1031 秋かせに袂の露も古郷をしのふもちすりみたれてや思ふ
 1032 いかにも又秋の夕を詠むらんうきは数そふ旅の宿りに
 1033 みる人の心の秋にむさし野もをはすて山の月やすむらん
 1034 なに事もみなよくなりぬと計を此秋風にはやもつけせ

東照権現十三回忌につかはさる心経のつゝ
 み紙に

1035 時鳥鳴はむかしのとはかりやけふの御法を空にとふらし
 1036 あつさ弓八嶋の波を治をきて今はたおなし世を守るらし(七二丁裏)

寛永十六年三月
 かしわの葉のかたしたる石を將軍
 家光公につかはさるとて

1037 色にこそあらはれすとも玉かしわかふるにあかぬ心とはみよ

「詞書」かしはの葉の…三句「玉かしは」

硯の命は世をもてかそへしるとや人の世のさしも
 みしかきにかえまほしき事よ 故院の常に
 御手ふれし物をとおもへは崩御の後座右に
 をきて朝夕もてなしていつしか廿年あまり七
 年になりぬ今はとて永源寺の住持にゆつり
 あたへてかの寺の具となさしむおのつから
 経陀羅尼書写の功をつまはなとか結縁に
 ならさらんやとてなん

1038 海はあれと君か御かけをみるめなき硯の水のあはれかなしき(七二丁表)

「詞書」…かへまほしき事よ…をのつから…」

1039 我後は硯の箱のふたよまでとりつたへてしかたみともみよ
 山陰道のかたはらに世捨人あり白茅をむすひ
 て住る事十年はかりになりぬかの庵に銘して
 桐江といふ三公にもかへさる江山を望て詩

情のたすけとなし一鳥なかさる岑寂を

あまなひては禪定を修し既に詩熟し

禪熟せりこゝに十篇の金玉をつらねて

投贈せらる幽賞やます翫味あくことなきあ

まりに芳韻をけかしたたなき言葉をつゝり

てこれにむくふといふ愧赧はなはたしき物ならし

1040 うらやまし思ひ入けん山よりもふかき心の奥のしつけさ

「詞書」山陰道のかたはらに世すて人あり…江山をのそみては…」

1041 いかてそのすめる尾上の松風に我もうき世の夢をさまさむ(七二丁裏)

1042 おもへこの身をうけなから法の道ふみもみさらん人はひとかは

1043 うくひすも所えかほにいとふらん心をやなく人來くと

1044 心してあらしもたゝけとちはてゝ物にまきれぬ蓬生の門

1045 山里も春やへたてぬ雪間そふ柴のまかきの草青くして

1046 古年よりも今年やしけき雪をもるみ山の杉の下折の声

1047 此国たてゑかにへたてぬこそは恨なれ誰あらそはむ法のころもを

「二句」へたてぬこそは「四句」。あらそはむ

1048 世にふるはさてもおもふに何をかは人ももとめて身を拳めむ

「四句」人にもとめて」

1049 古郷にかへれはかはる色もなし花もみし花山もみし山

永井信濃守領し来れるさたといふ所の

天神の社荒廢して年久しく成ぬるを

修造のいとなみ功終りてかのやしるに

籠奉りたき念願とて御製を申請し(七三丁表)

時つかはさる

1050 家の風世々に伝えて神垣や絶たるをつく梅も匂はむ

「詞書」…修造のいとなみ功を終て…」

海への月に雁ある絵の賛繪閣 所望ありしに

1051 こと浦に心もとめす来る雁やおなし所の月に鳴らん

東照宮三十三回の遠忌をむかへられて彼

社に奉納せしめ給御歌(七三丁裏)

1052 登しをへて有やまひま勢るしめの宇ちにみこと能りをか美もき、も屋

〔四句〕「みこと能りをは」結句「か美もき、き屋」

1052 屋よひ山散きをくれ無もうらみ志なはなを右月のぬ佐とたむけ牟

1052 牟は玉の具らくまよ半む道も以さしらす喜ぬらし世越さとるひ騰

1052 騰ひみはや部けゆくか良におもき夫の月に有きよをへ太てたるか登

〔三句〕「をもき夫の」

1052 登りもしれ也よあさき久はうらみ思よこの夜武かさをい通かわすれ牟

〔二句〕「也よあさ久は」

1052 騰きすくる八またのお俱てあたに思も霜に布り行は津かしの身屋

1052 太のむへき也とならな九にこゝに師もきてと不人をま津かはかな散

1052 有きてよま屋まふきさ久らこのき之にたゆた布波のう都たへにみ無

〔初句〕「有きてよる」

1052 夫りくるも夜すくそす来る山をろ思にた、よ婦雲やか徒しくるら志

〔三句〕「山おろ思に」

1052 良くとみるも弥かてうき俱のたねと斯れた、おも武へきはし頭う仏しや右

1052 部のさとは八重のしら苦もへたて四にゆきか副ゆめをみ通るあはれ佐

1052 有き霧と也やなかめ屋るあしの夜のもしほ弥くてふこ八のけふり越

1052 勢き入れて九まむもい久よしらす来の下ゆ俱水にめ苦るさかつ喜

1052 宇らにつり師まにひく之もなつか思き春に斯あかすみ四さくらた以

1052 能こりぬし不るき世に布るあさち婦に雨と武るらしけ副のなみた半

1052 美し春の津つしをう都すやまみ徒のた、ま頭あをきな通になりゆ具(七四丁表)

(白紙)(七四丁裏)

たけかりの興ある日袖にこきはる、はかりも

木の葉はまた染あえねは

1053 霜の後又もきてみむ名にしおは、さこそやしほの岡の紅葉々

御茸狩の、ち將軍家へけさんに入へく候

御製申請度よし板倉周防守申御清書

色紙にあそはしてつかはさる

1054 分みれは草木もさらにことやめて野山か末の道もさはらす

〔詞書〕「板倉周防守所望申…」

御山庄に御幸ありてはたえたといふ事を

たち入給ひて

1055 ゆかてはたえたへし春の山里にみし面影の月はかすます

行幸の御をくり物のさうのことのことち包

にかきつけさせ給ふ(七五丁表)

1056 しるしをく世のふることのおのつから絶たるをつく跡ならはなん

〔三句〕「をのつから」

將軍家光公薨去の時 女院御方へつかはさる

1057 あかなくにまたき卯月のはつかにも雲かくれにし影をしそ思ふ

1058 いと、しく世はかきくれぬう月やみふるや涙の雨にまさりて

1059 ほと、きす宿にかよふもかひなくてあはれなき人の言つてもなし

1060 たのもしな猶後の世も目の前にみることほりを人の思へは

1061 た、たのめかけいや高き若竹の世々の緑は色もかはらし

〔二句〕「かけいや高く」

野山なつかしく徒然のあまり花壇のあたり

徘徊候て手折候まま一枝見参入候

1062 此比の菊そうつろひさかりなるさこそ紅葉も千種なるらめ

野山漸色つき叡覧に備へたきと存候

折ふし御花壇の一枝拝領候中く紅葉には(七五丁裏)
目もうつるましくかしこまりて詠入候計にて候

聖護院宮道見

1063 一枝の菊にけたれて色もなし山の木の葉は千種なからに

〔詞書〕野山漸々色つき…〕

北山鹿苑寺章長老所望申つかはざる
此比の時雨にもりの紅葉もいかと

1064 いは、やな衣笠岡の秋の色をきてみよとこそ鹿も鳴らめ
御影をか、しめ給ひて色紙にあそはし

付らる

1065 うしやこの三山かくれの朽木かきさても心の花しにほは、(七六丁表)

〔詞書〕…色紙形にあそはし付らる〕

此一帖者

後水尾院御集也依小田原侍従正通朝臣

所望而不顧秃筆令書写之并加奥

書秘不可被幽(マ)函底者也

天和三稔初夏上旬候 黄門侍郎藤原宗量(七六丁裏)

〔…秘不可被出函底者也〕

御歌数

春 百九拾六

夏 七十貳

秋 三百三十貳

冬 八十三

恋 百四十五

雑 百四十八

积教 貳十

賀 貳十四

詞書添 四十貳

都而千六拾二

外二八重襷と候はん一首(七七丁表)

〔七七丁表の記述は天理大学附属天理図書館蔵本ナシ〕

此一冊岡定右衛門所持之也令懇望写之者也

享保十二丁未初秋

福富忠章六拾六歳(七七丁裏)

〔底本七七丁裏は朱墨、天理大学附属天理図書館蔵本ナシ〕

(本学文学部教授)